



第 19 号

令和 8 年 (2026)

3 月 22 日 発行

巻頭挨拶 P3

- ⊙ 緒方 徹 (昭 49 卒 会長) : 「午」の年に
- ⊙ 重満 紀章 (平 7 卒 代表 幹事) : 人工芝グラウンド裏話
- ⊙ 戦記 : 令和 7 年度 (2025) シーズン

戦いを終えて P9

- ⊙ 篠田 啓太 (4 年 主将) : 大学サッカーとは
- ⊙ 赤金 龍之輔 (4 年) : ア式の振り返り
- ⊙ 安部 維宏 (4 年) : 1 kg の積み重ねは自信に
- ⊙ 宇都宮 彩輝 (4 年) : フロントスタッフとしての 4 年間
- ⊙ 木寺 輝 (4 年) : 怪我と向き合った 4 年間
- ⊙ 瀬崎 斗雅 (4 年) : 思い出の 1 試合
- ⊙ 西川 莉紗 (4 年) : 様々なことに向き合ったア式ライフ
- ⊙ 藤原 律 (4 年) : 周囲に支えられて
- ⊙ 星野 湧賀 (4 年) : コミットメント
- ⊙ 松田 宥之介 (4 年) : 法人設立という取り組み
- ⊙ 三浦 考貴 (4 年) : 朱に交われば赤くなる
- ⊙ 矢野 汀 (4 年) : 地域と向き合い続けた発信の日々

令和8年度シーズンに向けて P25

- 🏆 上尾 陸 (新4年主将)：3年ぶりの戴冠を夢見て
- 🏆 川合 楽 (HC)：「総勢、一意専心」
- 🏆 伊崎 穰 (新3年)：今年こそは
- 🏆 川勝 天翔 (新2年)：三步下がって二歩下がる、その先へ

海外便り P31

- 🏆 山木 達生 (昭59卒)：ナマステ from 西インド
- 🏆 栗津 義一 (平7卒)：ダブリンでの仕事と暮らしの近況
- 🏆 諸石 央 (平12卒)：マドリッドでサッカー三昧
- 🏆 金田 大樹 (平28卒)：W杯に向け熱気高まるアメリカから

自由テーマ P59

- 🏆 杉本 達朗 (平18卒)：ア式初の産科医として
- 🏆 上田 友紀子 (津田塾平3卒)：ホームタウン国立でのワインバル奮闘記

私の学生 LIFE P68

- 🏆 堤 翔太 (4年)：我が家
- 🏆 西野 景一郎 (4年)：仲間の姿
- 🏆 八木 琳太郎 (4年)：旅の恥はかき捨て
- 🏆 八巻 太朗 (4年)：焼きそば屋
- 🏆 山田 あさひ (4年)：自ら学ぶことの大切さ
- 🏆 山本 真子 (4年)：人生を彩るもの

追悼 P82

- 🏆 有志一同：逝きし仲間を偲んで

編集後記 P95

- 🏆 福本 浩 (昭52卒 編集長)：あれ、卒業証書、もらってないよな？



🏆 「午」の年に

緒方 徹（昭49卒） 西松会会長



今年は午年です。馬は自ら後ろに下がらない力強い動物であるため、物事がスムーズに進み、努力が実る年と言われます。「うまくいく！」 また、正午の太陽を表す「午」は、前向きなエネルギーが高まり、運気が上向く年とも言われています。この年に一橋大学ア式蹴球部は新しい指導体制にチャレンジし、地域に根を下ろす大学の部活動としても新しい試みに臨もうとしています。学生が部の運営を担ってゆくという、一橋大学ア式蹴球部の輝かしい伝統を大事にしながら、リーグ戦を中心としたサッカーでの奮闘を大いに期待します。

一方で、先の衆議院選挙では、政府与党が歴史的な大勝をしました。SNSの極端な影響も指摘されています。それは何故なのか、何を意味するのか、これから社会で活躍する皆さんにどのような影響を与えることになるのか。政府与党側が次々と繰り出す政策の大転換は、時代の大きな変わり目になるかもしれません。世界情勢を見ても同じことが言えるでしょう。皆さんには是非、“切り取り”の動画や言論ではなく、そもそもの基になる事実をしっかり把握して、一橋大学に学ぶ者として考えて行動することを大切にしてください。皆さんの素晴らしい未来のために。

*西松会総会 2026年1月10日 如水会館にて



⚽ 人工芝グラウンド裏話

重満 紀章（平7卒） 西松会代表幹事



年初の総会で代表幹事を仰せつかった平成7年卒の重満です。

まず始めに、この冬の人工芝張り替え工事についてご報告します。2021年3月に竣工した人工芝グラウンドですが、抜け毛の症状が顕著になっておりました。抜け毛は常に問題ですので施工してくれた日本体育施設さんや材料供給者であるアストロスポーツさんらに相談して原因究明に努めておりましたが、最終的に製品の不具合だろうという結論に至り、無償で新品しかも最新グレードの製品で張替え工事をしてもらえることになりました。アメフトグラウンドの部分については、ツートンの製品は製造リードタイムが長いとのことで、この冬には間に合わず、来年の冬に施工してもらいます。

10数年後と予想していた老朽化に伴う張替え工事に向けた修繕資金の積み立てが

（竣工直後から頭痛の種ではありますが）、これで5年の時間稼ぎができたこととなります。加えて、昨今の酷暑や、昔と違って授業に出る風潮から、夜間練習のニーズが高まっていることを背景とした照明設置の要望を現役から受け取っており、5年の時間稼ぎを照明に変えられないかということも、総務担当の金子さんを中心に検討してくれています。あいにくグラウンド入り口にある配電盤の容量が小さく、十分な照度を得るためには、そのレベルの照明設備に加え、配電盤の置き換えも必要であることが判明。総額3,500万円程度が概算見積りで、すぐの話にはなりません、今後議論を続けていきたいと考えております。



さて、ここからが本題。人工芝については過去に小員自身も、同期で先輩の松井さんと共に一緒に取り組んだ同期の神谷君も2回、最初に取り組みを始めて病気療養のためバトンを我々に渡さざるを得なかった倉崎先輩（昭57卒）も寄稿されているので、今回は主に、これから社会に出ていく現役の皆さん向けに、小員なりの裏話を披露させていただきます。無駄に長い話ですが、お付き合いください。

小員は、もともと現役時代はOB対応などにあまり興味なく、同期の神谷君が小平から如水会館での幹事会に通ってくれていましたが、それ自体あまりよく把握していないようなタイプでした。卒業してからも会費はきちんと払っていましたが、小平に応援に行くこともほとんどないような怠けたOBでした。総合商社に就職し、2005年に32歳で米国駐在してほどなくして、向こうの冷涼な気候のためかメンタルを患い、6年間の駐在を経て、2011年に帰国後もそれが治らず、会社を休むことこそなかったものの、毎日が憂鬱で、病院を転々とし、薬が手放せない日々でした。そういう状態でしたので選択肢がある限り公の場は避け、従って小平の応援もあまり行かず、OB戦なども行かなかったか、断り切れずに参加した時も浮かない気持ちで静かにしていたと思います。

そのメンタルの病が、2017年9月に、とあるきっかけで急に治ったのです。

具体的に書くと長くなるので簡単に申し上げますが、要は自分の従事する仕事に関する会社の方針変更の発表を聴いて、会社なんてこんなものか、と思ったことがきっかけです。10年に亘って付きまとわれたいわゆる「黒い犬」がいなくなった解放感たるや筆舌に尽くせません。何でもできると勘違いしていた、若かりし日の自分が戻ってきました。そんな中で参加したのが2018年1月のOB総会でした。神谷君にそそのかされ(?)、当時の金谷代表幹事の挑発(?)に、売り言葉に買い言葉で乗ってしまい、人工芝プロジェクトを引き受けてしまったのです。しかし、ことはそう簡単ではありませんでした。手始めにということで、神谷君と相談してみんなに集まってもらった同期会。新宿の居酒屋でしたが、面々から予想外の冷たい反応を受けました。「そんなの安請負して、俺たち協力できないよ」「1人当たり40万円なんて、払えるわけないじゃん」現実とはこういうものかと愕然としました。打ちひしがれました。

しかし、勘違いしている私には何も怖いものはありません。できることから始めました。

1つ上の先輩の木村さん(前代表幹事)経由での東京都サッカー協会への資金提供の打診。数億円出すと言われたのですが、条件が週末や夜間に女子の選抜選手の練習場としても使えること。これが大学側の了承を得られず頓挫しました。ア式蹴球部OBに名を連ねる元衆議院議員で元東京都の知事でもある石原慎太郎さんへの夜討ち朝駆け。「石原慎太郎グランドにします」と持ち掛けましたが、病氣療養中を理由に秘書に丁寧なお断りを受けました。

一番効果的だったのは、見積もり業者へのアプローチでした。

私は総合商社で鋼材を扱っており建設業界に多少かかわっています。当時、総額4億円近い見積もりが、業界の端くれの人間として、高過ぎるようになっていました。そこで、見積業者の話を聴こうと思いました。最初に連絡を取ったH社は、「では、○月△日か、○月×日か、お越し頂けますか?」と言うのです。私は商社の人間ですからお客さんのところに足を運ぶのが仕事です。潜在的ながらもお客である私に「来い」ということに、まず違和感を覚えました。そうは言っても行くしかありませんから会社を休み、地図を片手に迷いながらも辿り着き、1階の受付電話から電話しました。すると驚いたことに、こう言うのではないですか。「あ〜、事務所は2階なので上がって来てくれますか?」この会社、儲かってるな。

これがきっかけで実際に施工して下さった日本体育施設さん含め計4社に相見積もりして頂き、最終的にスペックダウンなども経て1億2千万円弱まで工費を落としました。そして2019年1月の総会でプロジェクト推進の承認を頂くのですが、その頃には、4億円だから現実味がないと思っていらっしやっただであろう先輩方、最初は冷たかった同期たちも協力してくれるようになっていました。結果的には、ア式蹴球部として総額7,500万円のご協力をいただき、当部の負担分の6,000万円弱を供出し2020年3月に竣工しました。どうにもこうにも動かない大きな石臼をウンウン唸って神谷君と一緒に押しているうちに、手助けしてくれる人がだんだん現れ、動き始めた感じでした。

私は2019年4月に再度海外赴任で日本を離れましたが、その頃には

大きな石臼は神谷君や松井先輩、そしてアメフトなども含め多くの関係者の手で、私がいなくても勝手に回るようになっていました。石の上にも3年と言いますが、正しいことを頑張っていれば物事は成就するものだということを学んだ貴重な経験でした。得難い経験をさせて頂いたア式蹴球部に改めて深く感謝する次第です。

*西松会総会 2026年1月10日 如水会館にて



八木琳太郎

八木信彦氏

松井伸太郎
平7卒

*今年卒業する現役4年生の
八木琳太郎の父・八木信彦氏と
西松会副代表幹事の松井伸太郎は
丸紅の同期入社だった

*特別講演をいただいた
元サッカー日本代表でア式蹴球部の
コーチを務めた戸田和幸氏を囲んで



重満紀章
平7卒

戸田和幸氏

木村義幸
平6卒

神谷佳典
平7卒

令和7年度シーズン

2025

★主将：篠田啓太 (4) / ヘッドコーチ：川合 楽 (法政大学卒)

★最高学年：赤金龍之輔 / 安部維宏 / 宇都宮彩輝 / 岡田一生 / 木寺 輝 / 窪田昌平 /
佐々木晨之輔 / 瀬崎斗雅 / 堤 翔太 / 西野景一郎 / 星野湧賀 / 藤原 律 /
松田宥之介 / 三浦考貴 / 八木琳太郎 / 八巻太朗

★MGR：小山結夢 / 西川莉紗 / 矢野 汀 / 山田あさひ / 山本真子



西川・山田・岡田・窪田・瀬崎・三浦・西野・安倍・八木・八巻・佐々木・山本・小山・矢野
藤原・宇都宮・篠田・堤・赤金・木寺・松田・星野

【試合メンバー】

FW 三浦 (4)・藤原凌 (3)・鈴木央 (2)

HB 赤金 (4)・瀬崎 (4)・堤 (4)・星野 (4)・西野 (4)・八巻 (4)・上尾 (3)・伊崎 (2)

BK 安部 (4)・篠田 (4)・中川 (3)・若林 (3)・相内 (2)・河田 (2)・鈴木泰 (2)

GK 藤原律 (4)・藤原拓 (3)

【戦績】 東京・神奈川リーグ2部：6位 7勝4分7敗 → **2部 残留**

対戦順→	工学院	日大生資	創 価	神工大	都立大	科学大	芝工大	成 城	上 智
前期	△1-1	●0-4	○4-2	△2-2	○2-0	○2-1	○1-0	●1-5	●1-2
後期	○1-0	△0-0	●1-2	●0-1	●1-2	○3-0	○3-2	●2-3	△1-1

【東京・神奈川リーグ2部 最終順位表】

順位	大学	勝点	勝	分	負	得点	失点	差
1	上智	37	11	4	3	33	17	16
2	神工大	35	11	4	5	34	27	7
3	成城	32	10	2	6	43	25	18
4	創価	28	8	4	6	25	23	2
5	芝工大	25	7	4	7	27	27	0
6	一橋	25	7	4	7	26	28	-2
7	都立大	25	8	1	9	22	28	-6
8	日大生資	18	4	6	8	17	29	-12
9	科学大	17	4	5	9	21	29	-8
10	工学院	10	2	4	12	20	35	-15



戦いを終えて

 大学サッカーとは

篠田 啓太 (4年 DF 主将) 東京・暁星高



私にとって一橋大学ア式蹴球部で過ごした4年間は、何ものにも代えがたい貴重な時間でした。卒部から月日が流れ、改めて振り返るとき、これほどまでに学生が自立してサッカーに打ち込める環境が、いかに特別であったかを強く実感しています。在部中、多くのOB・OGの方々から「ア式の良さは学生が主体的に行動できる点にある」という言葉を幾度となく耳にしてきました。当時の私は、その言葉を半ば当たり前のこととして聞き流していましたが、今になって、ようやくその真意と、主体的に取り組むことの本当の重みを身に染みて感じています。

ア式に代表される大学サッカーが、それまでの部活動と決定的に異なる点は、絶対的な指導者という存在が介在しないことにあります。一橋という環境においてはピッチ上の戦術から日々の運営、さらには「事業活動」に至るまで、そのほとんどが学生の手任せられています。誰かの指示を待つのではなく、自ら動かなければ何も始まらない。この環境は一見すると自由で刺激的ですが、その裏側には常に「結果に対する全責任」という重圧が伴っていました。特に3年生のときに経験した「リーグ戦12連敗」は、その厳しさを象徴する出来事でした。毎週のように敗戦を重ね、修正を試みてはまた負ける。監督からも多くのアドバイスを頂きましたが、ピッチでその苦境を直接打開できるのは私たち自身しかいません。自ら考え決断し、それでも負け続けるという事実は、非常に重いものでした。しかしあの苦しい時期を経て、主体性とは単に自由に振る舞うことではなく、逆境の中で「今、自分に何ができるか」を問い直し、行動し続けることなのだ学びました。

この4年間で得たものは、サッカーの技術以上に、正解のない問いに対して自ら答えを導き出し、その結果を引き受ける「覚悟」だったと思います。この経験は、社会という新たな舞台に立つ私にとって、きっと大きな指針となるはずですが、最後になりますが、あらゆる面で私たちの活動を支えてくださったOB・OGの皆様、共に戦った同期、そして後輩たちへ、心からの感謝を申し上げます。ア式蹴球部が「学生主体」という伝統を脈々と受け継ぎ、さらなる飛躍を遂げることを心より祈念し、私の振り返りとしてさせていただきます。4年間、本当にありがとうございました。

*進路：住友商事株式会社



🏆 ア式の振り返り

赤金 龍之輔 (4年 FW) 千葉・流通経済大学付属柏高



ア式蹴球部での4年間を終えた今、改めて振り返ってみると、私たちがどれほど恵まれた環境に身を置いていたか、その背景にどれほど多くの皆さまの支えがあったかを強く実感しております。私が初めて小平のグラウンドに足を踏み入れた日のことは、今でも鮮明に記憶に残っています。目の前に広がる鮮やかな緑の整えられた人工芝のピッチ。その美しさに圧倒され「ここでサッカーができるんだ」という高揚感に胸を躍らせたのを思い出します。

入部当初の私にとって、その素晴らしい環境は「与えられて当然」のものとして映っていたのかもしれませんが、日々の練習を積み重ねるにつれ、その認識は大きな間違いであったと気づかされました。この人工芝のピッチは決して当たり前存在しているものではありません。長年にわたり、この部を繋いでくださった OBOG の皆さまが現役部員を想い、汗を流し、物心両面で支えてくださった結晶そのものです。私たちが怪我を恐れず雨の日も風の日もボールを追い込み、技術の向上に没頭できたのは、ひとえに皆さまが整えてくださった最高の舞台があったからに他なりません。

ア式で過ごした4年間を振り返ると、それは自分自身の「伸び代」を信じ直すための時間だったと感じています。高校時代、思うような結果が出せず、一度はサッカーから離れようとした私にとって、大学サッカーへの挑戦は大きな不安を伴うものでした。しかし、どんなに失敗してもポジティブな声をかけ合い、互いの成長を認め合うこのチームの温かな文化が、萎縮していた私の心に火を灯してくれました。こうした素晴らしい伝統が受け継がれてきたのも、長年にわたりア式を温かく見守り、支え続けてくださった OBOG の皆さまの存在があったからこそだと思います。

これからは OB の一員として新たな一步を踏み出します。

次の世代を担う後輩たちが、私たちが味わったあの感動を同じように感じ、この素晴らしい環境で一点の曇りもなくサッカーに打ち込めるよう、私自身も微力ながら力を尽くしていく所存です。最後になりますが、これまでの多大なるご支援とご声援に心より御礼申し上げます。皆様から頂いた恩をこれからの人生、そしてア式蹴球部のさらなる発展への貢献という形で返していけるよう精進してまいります。今後ともよろしくお願い申し上げます。

*進路：一橋大学大学院経済研究科





🏈 1 kg の積み重ねは自信に

安倍 維宏 (4年 DF) 東京農業大学第一高

私の4年間の学生生活において、切っても切り離せない存在となった

「筋トレ」について書こうと思います。もちろん、語れるほどの凄まじい肉体を持っているわけではないし、まだまだ精進の身ではありますが、少なからず自身の大学生活に影響を与えてくれたものでした。

「筋トレ」との出会いは高校時代でした。周囲の影響もあり、もともと細身だった私は「申し訳程度」にバーベルを握って見たのです。しかし、初めてのベンチプレスは30kgを挙げるのが精一杯。そのあまりの重さに「自分には才能がない」と決めつけ、早々に逃げ出したのを覚えています。そんな私が再びバーベルと向き合うことになったのは、大学でサッカーを続ける中でのことでした。どんなに頭を使ってプレイしてもフィジカルの差で通用しない場面が増え、自分の限界を痛感したのです。最初は小平体育館のトレーニングルームでコソコソと練習を始めました。当時はフィットネス・ジムに行く勇気がなく、アメフト部の屈強な選手たちが現れると逃げるように部屋を後にしていたほどですが、2日に1回のペースで通い続けるとバーベルの重量は確実に伸びていきました。「適切な負荷と栄養」を与えれば体は必ず応えてくれる。その明快な相関関係に私はいつしか快感を感じるようになっていました。

話は変わりますが、20年近くサッカーに捧げてきて感じるのは、この競技の底知れない難しさと、それゆえの面白さです。サッカーは、手ではなく不自由な足を使うスポーツであり、11人の意志が絡み合う複雑な集合体です。どれだけ完璧に準備しても一瞬の運で負けることがあれば、逆に劣勢でも1つのミスで勝ってしまうこともある。同じ局面は二度と訪れず、昨日の「正解」が今日の「間違い」になることさえあります。この「不確定要素の多さ」がサッカーの醍醐味であり、私が大学までこの競技にのめり込んだ理由でもあります。しかし真剣になればなるほど、暗闇の中を走っているような感覚に陥ることもありました。目に見える指標が少ないこの競技で自分を信じ続けるのは時に困難です。その点、「筋トレ」は残酷なまでに誠実でした。昨日まで挙がらなかった重さが今日なら挙がる。その「1kgの更新」は、自分の努力を数値として証明してくれる唯一無二の指標となりました。迷いの中にいた私に、「積み重ねることの尊さ」を教えてくれたのです。

「筋トレ」で得た肉体的な強さは、ピッチの上でも明確な変化をもたらしました。今まで当たり負けしていた場面で、グッと一歩踏ん張れるようになる。その物理的な手応えは、「自分はサッカー選手として確実に前進している」という揺るぎない確信に繋がりました。4年次に人生で最も充実したサッカーライフを送ることができたのは、この「裏切らない積み重ね」が心の支えになっていたからだと思います。かつては怖くて入れなかったジムも、今では、ほぼ毎日通う日常の一部になりました。サッカーのために始めたトレーニングは、いつしか私の生活を支える習慣となっています。卒業後も、この「1kgを積み上げる感覚」を大切に歩んでいきたいと思っています。

*進路：味の素株式会社



🏆 フロントスタッフとしての4年間

あやき
宇都宮 彩輝 (4年FS) 神奈川・横浜市立南高



私は4年間フロントスタッフとして事業部に所属し、部の発展、平たく言えば集客と収益の向上に力を注いできました。多くのOBの方にとっては馴染なく、他大学のサッカー部で同様の役割を設けているチームも、ほとんどないのではないかと思います。ですが、そのような中でもご理解を示してくださった酉松会幹事の方々、部員の皆さん、そして事業部設立という最初の大きな一歩を示してくださった長島直紀さん(令6卒)など多くの人々に支えられ、個人の成長という観点でもア式生活という観点でも、充実した日々を送ることができました。4年間を通じてこの歴史あるア式蹴球部が、より多くの人を巻き込むクラブになる手助けを少しはできていたらよいなと、卒部した今しみじみと感じております。さて、前置きが長くなりましたが、ここでは私のフロントスタッフとしての思い出を、2点ほど振り返ればと思います。皆様にフロントスタッフという役割を少しでも知っていただき、身近に感じていただけるきっかけになれば幸いです。

1つ目は、大学2年の秋、IKKYO FOOTBALL ACADEMYの開校です。活動が始まったばかりで事業といえる事業がなかった当時の私たちにとって、本業であるサッカーと強みである勉強、さらには理想とする地域密着の全てを兼ね備えた自習スペース付サッカー教室の開催は、かねてからの悲願でした。前例のない事業作りに、自分にとって初めての予算をいただき、不安と恐怖で逃げ出したくなる時もありましたが、先輩方の後押しと同期の力添えのおかげで丁寧にヒアリングと体験会を繰り返し、遂に毎週金曜日の定例開催を実現することができました。初めての体験会に地域の子もたちが集まり楽しそうにボールを蹴っていた光景、正式入会の応募フォームにたくさんの回答が来ていることを目にした瞬間は、一生忘れないことでしょう。今では毎週60人以上の子もたちが通う大所帯となったIKKYO FOOTBALL ACADEMYですが、これからもより一層発展し、ア式蹴球部の、ひいては小平市のシンボルとなってくれることを楽しみにしています。



2つ目は、大学3年の秋、あるスポンサー様との契約です。

それまでもスポンサー契約は幾つかさせて頂いたものの、その内容は採用支援を商品に金銭を受け取るものが主となっていました。例えば、弊部の部員に向けた企業説明会を設定し、その参加人数に応じて企業側から金銭を頂く契約がございます。もちろん、こちらは大変ありがたく貴重なお話なのですが、それとは別に、私たちが行っている地域あるいは学生に向けた事業やメディアの価値を評価して頂き、それに対して対価を受け取る契約を目指していました。私たちのような大きくはないサッカークラブにとっては、前述のように人を説明会に集め、それを資源とする「採用支援軸のスポンサー契約」よりも、「事業やメディアを資源とするスポンサー契約」のほうが、将来的により一層の拡大を図っていくポテンシャルがあるからです。結果としてアルバイトの応募を行うため、あるいは資格試験塾の生徒を募集するためのパンフレットの広告掲載、YouTube 動画作成という形で、事業やメディアを軸とした幾つかのスポンサーシップ契約を締結することができました。改めて、学生主体の活動に対し多大なるご決断を頂いた先方企業様には深く感謝を申し上げます。私個人としては、今後のスポンサー契約のロールモデルとなりうるケースを卒業前に1つ作れたことは、大きな喜びと安堵を感じる出来事でした。



【YouTube 動画 VLOG】

<https://www.youtube.com/watch?v=RZkF72Zh0KY>

「部活とアルバイトの両立ってどうしてる？
サッカー部と塾講師アルバイトを両立する一橋生の1日」

【昨年度のスポンサー企業】

- *リソー教育（首都圏で学習塾「TOMAS」などを運営）
- *加藤ゼミナール（司法試験・予備試験のオンライン予備校）
- *TOKIUM（経理 AI エージェント）
- *レバレジーズ（IT エンジニア・クリエイター専門エージェント）
- *Re-grit Partners（スタートアップ・コンサルファーム）

最後になりますが、酉松会の皆様におきましては
4年間多大なるご支援を頂き、誠にありがとうございました。これからは私も1人のOBとして
ア式蹴球部を全力で応援していければと思います。どうぞ引き続きよろしくお願い致します。

*進路：味の素株式会社



⚽ 怪我と向き合い続けた四年間

木寺 輝（4年DF） 大阪府立天王寺高



私は1年生の終わり頃から膝や足首が痛むようになっており、予防として練習・試合前に必ずテーピングをして臨んでいました。利用するテーピングは部の資金で購入されたものであり、多くのOB・OGの方々からの支援が本当に形となって、私の大学サッカーを支えてくれていました。もし支援がなくテーピングを自費で行うことになっていたら、私は満足にプレイできずに、大学の途中でサッカー人生を終えることになっていたかもしれません。本当にありがたい支援だと、毎回練習前に感謝しながら準備していました。

私がこのように3年間も膝や足首を痛めた理由はよく分かっていませんが、おそらく体の使い方があまり良くないのだと思います。初めてサッカー人生で長期的に離脱した1年の冬から、いかにコンディションを整えるかが自分のサッカー生活の1つのテーマになっていました。整形外科に行って検査したり、整骨院に通ってアドバイスをもらったり、有効な休み方を調べたりと様々な工夫を試みました。前述のテーピングもその1つです。マネージャーに教えてもらってしっくりにきてから、ずっと同じ方法でテーピングを行ってきました。多くの工夫の積み重ねの甲斐あってか、4年になってからは負傷離脱はほぼゼロで、体がよく動くという実感を持ってプレーを続けることができました。それでも、私は実力面でなかなか満足できる成果を残すことができず、大学サッカーでの自分をあまり評価できていません。

怪我をせずにプレイすることは、チームの戦力になれていない自分には最低限のできることであり、評価できるポイントではないと思っていましたが、引退し、しばらく経った今思い返してみると意外と評価できることだったかもしれないと思うようになりました。取り組んでいるその時に「自分が成長している」と実感できなかつたとしても、きちんと目の前の課題に一生懸命取り組むことはあとあと「あれが自分の成長につながったのだ」と気づくことになるのではないのでしょうか。これからのサッカー以外の場面でも、サッカーに真剣に取り組んで得られた学びを活かしていきたいと思います。OB・OGの皆様、私の大学サッカー生活を支えてくださり、本当にありがとうございました。卒業後は私もOBの一員として、この恩を後輩へ繋いでいきたいと思っております。これからもア式蹴球部へのご支援のほどよろしくお願ひします。

*進路：Ascent Business Consulting 株式会社



🏆 思い出の1試合

とうま
瀬崎 斗雅 (4年MF) 熊本県立熊本高



引退して4ヶ月。長い間生活の中心だったサッカーがなくなり、他に熱中できるものを見つけられずにいます。思い返せばコロナの影響で対面授業の少なかった私にとって、ア式での生活は大学生活の全てであったと言っても過言ではないでしょう。そんなア式での活動の中で最も思い出に残っている試合を紹介させていただきます。

今シーズン前期の芝浦工業大学戦。試合当日の朝、監督の楽さんから1本の電話が入り、急遽スタメンで出場することになった。先発予定だった選手が怪我をしてしまったため、代役としての出場だった。その週は自分よりも調子の良い選手もいたが、どのような形であれピッチに立てることが純粹に嬉しかった。芝工大のグラウンドは硬めの人工芝で反発が強く、前半から足に疲労が蓄積していくのを感じた。相手は大型FWを軸に、その周囲に技術とスピードを兼ね備えた選手を配置し、そこから攻撃を展開する戦術を取っていた。私たちは守備ブロックをコンパクトに保ち、FWに効果的なパスを入れさせないようにする意識を徹底した。拮抗した展開の中で先制点を奪うことに成功し、前半は試合を優位に進めることができた。



*5月18日 第7節 vs 芝浦工業大学
於大宮キャンパス G



しかし後半に入ると。相手の激しいハイプレスに苦しみ、徐々に相手にボールを握られる時間が増え、防戦一方の展開となった。走らされる時間が続き、厳しい暑さも重なって足を攣る選手も出た。それでも誰ひとりとして集中を切らすことなく声を掛け合い、最後まで体を張って1点のリードを守り抜き、試合終了となった。この勝利は、まさにチーム全員で掴み取ったものだった。試合後、義務でもないのに応援に駆けつけてくれた同期の部員たちと喜びを分かち合った瞬間は、これからも決して忘れることのない大切な記憶である。

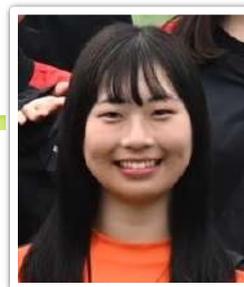
ア式蹴球部に入部して得ることのできた最も大きなものは「仲間」だと思います。プロになるわけでもなく、サッカーをするために一橋に入学したわけでもありませんが、OBOGの皆さんの支援のもとに恵まれた環境で最高の仲間たちとサッカーに夢中になることができました。事業部の活躍もあり、年々組織の規模、活動の規模が大きくなっていくア式蹴球部ですが、これからも同じ方向を向いて努力し、刺激し合える仲間に出会える場所であり続けてほしいと思います。

*進路：三井住友銀行



🏆 様々なことに向き合ったア式ライフ

西川 莉紗（4年 MGR） 大阪教育大附属高平野校舎



一橋大学の合格発表から4年。当時の私は、その後の大学生活を部活動に捧げることになるとは想像もしていなかった。同期（佐々木農之輔）からア式蹴球部の存在を知り、「誰かを支えたい」という漠然とした動機で入部を決めた。1年目は、まさに「自転車操業」の毎日だった。仕事に慣れ、選手の名前を覚え、人間関係を築くことに必死で、サッカーの中身を深く見る余裕などない。劣等感に苛まれる私にとって懸命に競技に向き合う先輩や選手たちの姿は、あまりにも眩しかった。



*2022 年末の学年対抗戦
ジャンケンではしゃぐ1年同期

*2023年2月10日 練習風景

手袋をしていても手先が冷たいくらいの寒さの中、積雪で普段と異なるコンディションにも拘らず普段以上の声量を出して取り組む選手たちに元気もらった



後輩ができ、「頼られる存在になろう」と決意した2年目以降。

1年目の葛藤を経験した自分だからこそ、寄り添えることがあると考えた。責任感や使命感は増したが、一方で「マネージャーの存在価値」という壁にぶつかった。選手の力になりたいと願っても、それを証明する術はない。仕事が分担され、ひとりで抱える役割が減ったことも不安に拍車をかけた。自分の否定的でネガティブな思考から後輩と衝突したこともあった。しかし、その経験が転機となった。ひとりで抱え込むのではなく皆で「部にどう貢献できるか」を考えるべきだと気づいたのだ。対話を重ねることで、マネージャーひとりひとりへの理解も深まっていった。

最終学年、ピッチで躍動する同期や、声を出してチームを引っ張る後輩の姿は誇らしかった。勝利した瞬間の皆の笑顔は、今でも私の iPad の待ち受け画面にしている。一方で、敗戦に呆然とする姿に胸が締め付けられ本音でぶつかり合う選手たちの関係性を羨ましく思うこともあった。カテゴリーを問わず、多くの選手が活躍する姿を見守る時間は、何にも代えがたい喜びだった。



*2025年10月10日 リーグ最終節

こうやってベンチに入るのは人生最後だなと
寂しく思いながら円陣に加わる
4年間一緒に過ごした同期たちの活躍を
そばで見られてよかったとの思いもあって
お気に入りの写真

この4年間で、私は人を分析する力や他者を支える喜びを再確認した。

一方で、「自分がどうしたいか」より「誰にどう思われるか」で価値を測る「他人軸」の性格は加速したように思う。しかし、この短所があるからこそ、周囲の悩みに敏感になれ、誰かの表情から微かな変化を汲み取ることができたのだと思う。もし、ア式で過ごした時間の中で、私が誰かの助けや活力、あるいは「明日も頑張ろう」と思うきっかけになれていたとしたら、これ以上の幸せはない。私に優しく接し、活力を与えてくれたア式の仲間、心からの感謝を伝えたい。

*進路：読売新聞社

【2年 後列左から】

- ・菅野 稟夏
- ・小坂 那帆
- ・小林 花帆
- ・佐藤 希美

【3年 中列左から】

- ・金子 彩乃
- ・山岸 薫
- ・品田 綸子

【4年 前列左から】

- ・山本 真子
- ・西川 莉紗
- ・山田あさひ
- ・小山 結夢



🏆 周囲に支えられて

藤原 律 (4年 GK) 東京・桜修館中等教育学校



引退してから4カ月が経ち、毎日のようにグラウンドへ足を運んでいた日々も、今では遠い昔のように感じます。まとまった時間を活かして国内をひとり旅したり四国を一周したり、ヨーロッパを周遊したりと旅行に明け暮れ、ア式生活に思いを馳せることも少なくなっていました。ところが先日、寝坊をして部活に遅刻し、リーグ戦に出られなくなる夢を見ました。飛び起きて冷や汗をかいている自分に苦笑いしながら、夢に出てくるほど、ア式での4年間は自分の中に深く刻まれているのだと改めて実感しました。現役時代に寝坊で遅刻したことは一度もありません。

私は2年生のシーズン途中でGKへ転向するという決断をしました。転向前までは、ボランチ・センターバック・サイドバックでした。もともとGKというポジションには興味があったものの、中高時代は土の硬いグラウンドで怪我を重ね泥だらけのユニフォームでプレイするGKの姿を見ては自分には務まらないと遠ざけていました。しかし一橋大学にはOB・OGの皆さまの多大なるご支援によって整備された素晴らしい人工芝のグラウンドがあり、私の背中を大きく押してくれました。恵まれた環境の中でプレーさせていただいた一方で、結果が伴わないことに苦しんだ4年間でもありました。転向を経て3年生のシーズンからリーグ戦に出場させてもらいましたが、1年での2部降格や2部6位という結果にGKとして関わったことに責任を強く感じています。

OB総会でもお話しさせてもらいましたが、同じくGKを務めてこられた重満先輩(平7卒)から、今シーズンは多くの助言や励まし言葉を頂戴しました。自分のミスから敗戦につながってしまった試合の後にも温かい言葉をかけてもらい、その度に心が救われると同時にチームは部員だけでなく多くの方々に支えられているのだと実感しました。

ア式で味わった数多くの挫折と喜びを胸に、これから社会人としての道を歩んでまいります。OB・OGの皆さまのおかげで、この上ない環境のもとでサッカーに打ち込むことができた4年間でした。今後は一人のOBとして、未来の後輩たちがさらに恵まれた環境で挑戦できるよう、微力ながら力を尽くしてまいります。これからもご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

*進路：三菱商事株式会社



🏆 コミットメント

ゆうが
星野 湧賀 (4年 DF) 静岡・韮山高



選手、マネージャー、コーチングスタッフ、フロントスタッフ（事業スタッフ）、総勢 100 人近い部員で活動を行う近年のア式。部員の活躍の場が大きく広がる中で自分の経験からア式に対するコミットメントについて考え、感じたことを書き記そうと思う。

ア式の部員であれば、何らかの目標を大なり小なり持っているはずである。そうした目標に対し大きな熱量や時間、工夫を費やして全力で取り組むことがコミットメントであると思う。自分も 1 人の選手として、リーグ戦での活躍という目標に向けて活動に取り組んできた。睡眠や食事の質には常に気を遣い、オフ期間には自主練に励むなど、振り返れば日々の練習や試合以外の時間にも常にア式やサッカーのことを考えた。しかし 4 年次のシーズンにおいてもベンチから数試合に 1 度途中出場をするのみで、リーグ戦での活躍という目標は達成されることはなかった。全力で取り組んだものの結果につながらなかったという点で、自分のコミットメントにはどこかで間違いがあったということ認めざるを得ない。大きな悔しさは未だに残っている。ただし、そうした感情は後悔とは違う類のものである。こうした経験を踏まえると、なぜア式の活動に全力でコミットする必要があるのかという問いに対する自分なりの答えは「ア式での 4 年間を後悔のないものにするため」である。

もうひとつ、主務や部長といった役職を務め、選手としての活動以外にもコミットしてきた経験から思うことがある。

サッカーだけをやるのみではア式に対するコミットメントは不十分であるということだ。

「学生主体で様々な活動に取り組むという姿勢を失えば、ア式はただのサッカー部になってしまう」ある日の OB 幹事会で、酉松会の代表幹事を務められていた木村さんが、このように仰ったことを覚えている。この言葉は自分の経験も相まって強く考えさせられた。まずサッカーで結果を残すことにフォーカスを当てるべきという意識はもちろん必要であるが、それを言い訳に部の運営のための諸活動や事業活動をないがしろにするべきではない。難しいのは承知であるが、二兎を追うことが一橋ア式におけるコミットメントであると感じている。

最後になりますが、OBOG の皆様、多大なるご支援と厚いご声援を本当にありがとうございました。おかげで一橋ア式での 4 年間は大きな財産となりました。今後ともよろしくお願い致します。

*進路：東レ株式会社



🏆 法人設立という取り組み

松田 宥之介 (4年 DF) 東京都立富士高



私の大学サッカーの4年間は、何よりもまず競技と向き合い続けた時間でした。試合に出られない悔しさや自分の力不足を痛感する日々の中で、「結果がすべて」という現実を突きつけられ続けました。サッカー部である以上ピッチで結果を残すことが最も重要であるという考えは今も変わっていません。その一方で、「競技と真剣に向き合うからこそ強いチームであり、続けるためには何が必要か」を考えるようになりました。そして、この問いに対するひとつの自分なりの答えとして取り組んだのが、法人設立のプロジェクトでした。

私が1年生の頃、既に法人設立の構想は話題に上がっていましたが、様々な事情により一度白紙に戻っていました。法学部で学ぶ中で法律が組織の在り方に深く関わることに興味を持っていた自分は、当時の事業本部長である長島さんに参加を願い出て、プロジェクトの再始動に携わることとなりました。しかし部員の誰も十分なノウハウをもち合わせていない中での挑戦は、まさに手探りの連続でした。法人設立の経験のある他団体へのヒアリングを通じて実例を学び、ア式のOBの方を含め専門家からの助言を頂きながら定款の作成や制度設計を進めました。

法人設立にはメリットだけではなく懸念や課題も多く部内や幹事会における合意形成も決して容易ではありませんでした。それでも私たちが共通して持っていたのは「ア式がよりよいクラブになるためには何が必要か」という視点でした。法人設立それ自体を目的とするのではなく、チームがより強く、クラブがより大きな価値を創出するための手段であるという前提を共有しながら議論を重ねました。その過程においては、OB・OGの皆様の存在の大きさを改めて実感いたしました。日頃からのご支援に加え、新たな挑戦に対して温かいご理解とご協力を賜り「くにこだフットボール」というひとつの形にたどり着くことができました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

法人としての運用は始まったばかりであり、その真価が問われるのはこれからです。整えた仕組みがどのようにチームの強化へとつながっていくのかは、これからの積み重ねにかかっています。しかしア式が今後、より強固な組織となっていくための一步を踏み出せたことは、部の未来にとって大きな意味を持つと信じています。4年間ピッチの内外で多くの経験をさせて頂きましたが、私の根底にあったのは「サッカー部として競技で結果を残したい」という思いでした。今後はOBのひとりとして、この組織が競技で結果を追い求め続けられる環境を支えたいと考えております。



松田宥之介 進路：司法試験受験予定

🏆 朱に交われば赤くなる

三浦 考貴 (4年FW) 静岡県立静岡高



戦いを終えて、ということですが、私はピッチ外での戦い、「学業・就活」と「スクール」について少し振り返りたいと思います。

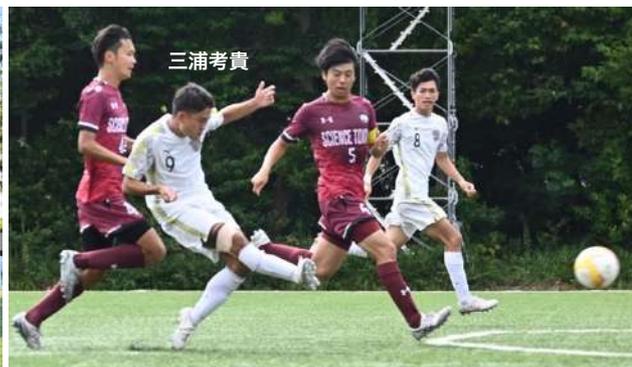
「学業と就活」に関しては、どちらも当初は何となくでしか考えてなく「卒業できればいいな」「どこかに就職できればいいな」程度の目標しか持てていませんでした。しかしア式蹴球部に入部し、同期と多くの時間を過ごす中で、大学ではきちんと授業を受けきっちり復習や課題を行う姿、就活では高い目標を掲げ企業分析や自己分析を行う姿をたくさん見ることになり、彼らに置いてかれてはいけない、彼らと共に努力すれば必ず高い成果を達成することができると思うようになりました。そこからは、個人としても頑張ることができ、同期と一緒に勉強や面接練習を行うことで「学業・就活」を自分の満足する結果で終わることが出来ました。「朱に交われば赤くなる」とはよく言ったもので、私自身もア式蹴球部という高いレベルの環境に揉まれ、そこそこの人間には成長することができたかなと思っています。文武両道をそつなくこなす同期、そしてア式蹴球部という環境がなければ今の自分はなく、感謝してもしきれません。

子供たちに勉強とサッカーを教える事業活動「スクール」に参加したのは2年次。それ以前はSNSで試合告知を行う「観戦事業部」に入っていました。活動に熱が入り切らない私を見兼ねた同期の八巻に誘われ、何となく「スクール」に入っただけでした。しかし、入ってすぐのミーティングで4年生の小林尚史さんや同期の宇都宮が本気でスクールを作り上げようとしている姿に感化され、そこからは毎週金曜日のサッカーコーチの仕事に加え、SNSの運用やチラシ配りなど、入部当初の自分には想像もしなかった仕事をする事ができました。正直子供は苦手な、どのように接し、どう教えられるのか分かりませんでした。徐々にサッカーを教えることの楽しさを味わえるようになりました。サッカー以外でも、どのようにすれば生徒数が増えるのか、どうすれば子どもたちが興味を持つ授業を提供できるのか悩み、自習室では教材を工夫したり、スタンプカードを作ったりと試行錯誤を繰り返しました。今では多くの子供と保護者、部員が関わる大きな地域貢献の場として確立されていることを嬉しく思います。私個人としても、多くの人と共に新しい価値を生み出すことのやりがいと喜びを感じられた貴重な経験でした。「スクール」に携わって本当に良かったと思っています。これからも「スクール」が、より一層発展することを応援しています。



サッカーだけでなく様々な面でも成長することができた一橋大学ア式蹴球部に入部して本当に良かったと思っています。私の16年間のサッカー人生、100点満点です！入部を決めた当時の私を褒めてやりたいです。最後に、これまで私のサッカー人生に関わってくださった全ての皆様、本当にありがとうございました。ア式蹴球部での経験を糧に、茨の道であろうこれからの社会人生活も精一杯精進してまいります。

*進路：伊藤忠商事株式会社



🏆 地域と向き合い続けた発信の日々

矢野 汀^{なぎさ}（4年 MGR） 東京・駒込高校



私は2年の秋頃に途中入部してから、地域の魅力を SNS で発信することでクラブと地域の関係向上を目指し、地域からのクラブへのさらなる認知度拡大を目的とする「地域広報」チームで活動してきました。体育会サッカー一部が地域の情報を発信する SNS を運営することは前例の少ない取り組みでもあり、振り返ると何が正解か分からないまま、常に探り探りで活動してきたように思います。投稿内容や発信の方向性に悩み、何度も立ち止まりながら、試行錯誤して一つひとつ形にしてきました。「サッカーと地域 SNS ってどう繋がるの？」と聞かれることも多く、その度に私は「地域との信頼関係と共感を育て地域社会におけるクラブのプレゼンスを高めることだ」と答えてきました。短期的な成果が見えにくい活動ではありましたが、地域の方々にクラブの存在を知ってもらい、親しみを持ってもらうことが将来的に応援や支援へと繋がっていくと信じて活動してきました。長いスパンで見たときに、一橋ア式にさらに多くのファンが増えるための初動として少しでも貢献できていたら嬉しく思います。

私が一橋ア式に入部する前から魅力的だと感じていたのは、クラブへの貢献の形がひとつではなく、部員それぞれに役割と居場所があり、ピッチ内外を問わず活躍できる場があることでした。実際に入部してからも、自分なりの立場で挑戦し、悩み、考え続ける中で、チームの一員としての責任とやりがいを強く感じるようになりました。思うようにいかないことや自分の力不足を痛感する場面も多くありましたが、その一つひとつの経験が、私自身を大きく成長させてくれたと感じています。これから一橋ア式がさらに発展し、地域にとっても欠かせない存在となっていくことを心から願っています。そして最後に、多大なるご支援とご声援をいただいたOB・OGの皆様、ならびに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

＊進路：日本電気株式会社



令和8年度シーズンに向けて

🏆 3年ぶりの戴冠を夢見て

上尾 陸 (新4年 MF 主将) 東京都立青山校



昨西松会の皆様、平素より温かいご支援・ご声援を賜り心より御礼申し上げます。人工芝グラウンドをはじめ、皆様のおかげで現役部員が日々活動できていることを、この立場になって改めて実感しております。先日のOB/OG総会では、「来年こそは祝勝会と題して集まりたい」とのお声を多く頂きました。寄せられた期待の大きさを感ずるとともに、1つでも多くの吉報を皆様にお届けしたいと決意を致しました。

昨季は、優勝と1年での1部リーグ復帰を目標に2部リーグに臨みましたが、7勝4分7敗で6位という結果に終わりました。最下位で終えた一昨季とはまた違う悔しさを経験し、スキルやメンタル含め全てにおいて至らなさを痛感したシーズンとなりました。心機一転、岩堀コーチを新たに招聘した今季は、再び川合ヘッドコーチのもとで2部リーグ優勝に挑みます。スローガンには「総勢、一意専心」を掲げました。部員全員が思いを伝え受け取り、不撓不屈の精神で勝利を追求する組織を作っていきます。



岩堀哲也 コーチ 東京都出身

西武学園文理高校卒業後、日本大学在学時から指導者のキャリアをスタート。筑波大学大学院では主に分析業務を担当し、在学中に鹿島アントラーズのスクールにて指導。卒業後はモンテディオ山形、カタレ富山の各アカデミーにおいて、ジュニア及びジュニアユースを担当。JFA 指導者 B 級ライセンス取得。



今季の2部リーグは、昨季以上に歯応えのある大学が揃い、全18試合で楽に勝てる試合は1つもないと断言できます。主将として、そんな険しい道の中で勝利を追求する組織の先頭にどう立つのか、立ってどこに導くのか、導いた先で組織に何をもたらすことができるのか。私が入部から追いかけて続け、昨季はどんな苦境でも進路を照らしてくれた眩く大きな光のような先輩たちはもうおらず、今度は私が組織を先導するのだと日々の練習から自覚させられます。私自身も未知数な部分が多い現状ですが、自分の選択が正解になるよう常に考え、仲間と議論し、勇気と自信を持ってラストイヤーを走り抜きたいと考えています。最後になりますが今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、ぜひ小平グラウンドへお越しいただき、ア式が勝利を掴む瞬間を見届けていただけると幸いです。今季も何卒宜しくお願い申し上げます。

令和8年度シーズン 東京・神奈川リーグ2部

大学	昨年度	大学	昨年度
◆ 成蹊大学	1部 10位	◆ 芝浦工業大学	2部 5位
◆ 東京理科大学	1部 11位	◆ 一橋大学	2部 6位
◆ 東京大学	1部 12位	◆ 東京都立大学	2部 7位
◆ 成城大学	2部 3位	◆ 日本文化大学	3部 1位
◆ 創価大学	2部 4位	◆ 防衛大学	3部 2位

🏆 「総勢、一意専心」

かわあい がく
川合 楽 (ヘッドコーチ) 前東京農工大学 学生監督



昨シーズンに引き続き 2026 シーズンもヘッドコーチを務めさせていただきます。まず昨シーズンたくさんのご支援をいただきながら、皆様のご期待に結果としてお応えすることができず大変申し訳ございません。自分の力不足やチームとしての完成度の不十分さは否めず反省ばかりです。この反省や味わった悔しさを糧に気持ち新たに 1月14日に 2026 シーズンをスタートさせました。チームとしてどのように進むのか。これが私たちの課題でした。何を強みに、何の為に戦い、何を成し遂げたいのか、目線を揃えられるような存在が、私を含めていなかったことが昨シーズン1年を通して上手くいかなかった要因のひとつだと振り返っています。



2026 シーズンは、まずは私がチームの指針を示してリーダーシップを発揮し、コミュニケーションによる発信と共有を大切にしながら、全員がチームを牽引できるような存在になることを求めています。コミュニケーションを取ることはチームスポーツにおいて必要不可欠で当たり前の要素ですが、昨シーズンは不足していたと感じています。ア式の中では少しずつ埃を被ってしまったのかもしれませんが。私は昨シーズンの反省と、この組織の文化や雰囲気を変えるために日々の練習から選手に求め続け、チームの土台を作りたいと考えています。



私は昨年の夏に友人と2人で富士山に登りました。宿のある七合目までは問題なくスムーズに登れたものの、夜になると激しい頭痛に襲われ、手足が痺れ、寒気で身体が震えるほど体調を崩してしまいました。何とか体調を整え、翌朝早くに出発しましたが、その日は風が強く、通常よりもスピードを落として登らなければならず、疲労が溜まり、2度の脱臼歴のある膝が悲鳴を上げ始めます。少しずつ休憩が多くなり、友人にも申し訳なく、八合目から九合目を見上げた時、ついに心が折れそうになりました。これまでの人生で最も過酷な時間でした。そんな時、友人に「登り切った時の達成感と景色を味わいたい」と言われ、ハッとしました。私は何を望んで山頂を目指しているのか、目的すらも忘れていたのです。自分を奮い立たせ、なんとか足を進め、頂上まで辿り着きました。日本で最も高い山に登った達成感、そこから見た景色は何物にも変え難く、素晴らしい経験でした。

私たちは再び、「2部優勝、1部昇格」という目標を立てました。

昨年、志半ばにして達成することのできなかった2部の頂上に登ることを目標に、チームは足を進めています。道中、上手くいかず壁にぶつかり、足を止めるような苦しい期間や時間もあるでしょう。そんな時こそチームの進むべき道を示し、味方を鼓舞し、感情を共有し、全員で壁に立ち向かいながら自分たちで立てた目標へ、望むべき場所へ再び踏み出せるようなチームになりたいと思います。それこそが「**総勢、一意専心**」であり、今年のチームスローガンを体現した姿だと、私は考えます。

最後になりますが、一橋大学ア式蹴球部OB・OGの皆様、

日々の多大なるご支援・ご声援のほどありがとうございます。昨シーズンの悔しい思いを晴らすべく、選手、スタッフ一丸となって、日々の練習から全力を尽くして取り組んでいます。今シーズンこそ結果でお返しをできるように、そして結果だけでなく、全員で奮闘し続け、ピッチの上で躍動する選手たちの姿もお見せできるように尽力いたしますので、よろしく願いいたします。

🏆 今年こそは

いざき じょう
伊崎 稜 (新3年MF) 神奈川・横浜市立南高



昨シーズンの目標は、「チームを勝たせる選手になる」ことだった。前の年に降格した1部の舞台で活躍するためには、2部でチームを勝利に導ける存在にならなければならないと考えたからだ。開幕2連敗を喫したものの、その後のリーグ戦は手応えを感じられるものだった。ス式(4年生)中心にタレントが揃っているため自分の役割も簡単で、チームの完成度も日々高まっている実感があつた。「このままいけば昇格できる」と本気で思っていたがその矢先に怪我を負い、3か月間離脱することになった。復帰できたのは残り数試合というタイミング。チームが最も重要な局面を迎えている中で、自分が何の責任も果たせないことが何よりも苦しかった。

リーグ戦を振り返れば、確かに一昨年よりもチームとしてボールは持てたし、自分のピッチでの存在感も増したと思う。ただ、チームが勝つか負けるかの土壇場の局面では、ス式に頼ってしまっていた。それはきっと、日々の練習の積み重ねに現れていた。練習では先輩たちが出してくれている声に呼応しチームとして決められている声を出すだけ。チームを引っ張ってくれていたス式の背中では、ピッチの上でもかっこよくみえた。試合でチームを勝たせる選手になるためには、日々チームの先頭に立つ覚悟が必要なのだ痛感した。今期リーグ戦の最終順位は6位に終わる。「こんなはずじゃない。俺たちならもっと上にいけた」、そう思う自分もいたが、結果は変わらない。昇格への挑戦は、来年の自分たちに託すしかなかった。

この2年間で私は「一橋ア式蹴球部の偉大さ」を強く実感した。私はスクール、OB、スポンサーの三つの活動に関わっている。普段スクールで教えている子供たちが集客試合では応援に来てくれ、OBの方々も会場で、またはメルマガを通して応援して下さる。総会では、OBの方々が紡いできたア式の歴史を肌で感じる事ができた。マネージャーやフロントスタッフの存在も含め、本当に多くの方がこの部に関わっている。その大きさと重みを知ることができた。そして、15年後の長期ビジョンが今年たてられたように、今後さらにア式はその関わりを広げ、大きくなっていくと思う。



ア式がさらに大きくなるために、今年こそは1部昇格を果たしたい。
 やっぱり組織として大きくなるためにサッカーの強さは必要不可欠であって、それを形にできるのは
 ピッチに立つ人にしかできない。去年チームを引っ張ってくれていた先輩方はもういないし、
 2部のチームを見渡せば熾烈な争いになることは間違いないと思う。去年までのパスを前線に預けて、
 「あとは任せました！」みたいな自分も見せてもらえない。学年が上がるにつれて見えてきた
 多くの人たちの思いをしっかりと背負い、ピッチで表現できる選手でありたい。
 「1部昇格」自分たちを信じて、今年こそ、この目標を達成する。



🏆 三步進んで二歩さがる、その先へ

かわかつ たかと
 川勝 天翔 (新2年MF) 東京・駒場東邦高



気づけば、大学生活が始まってから1年が経とうとしています。
 中高一貫校での6年間を終え新しい環境に飛び込んだ日から、あっという間の
 1年でした。振り返ってみると、私の大学生活はほとんどがア式とともにありました。世間一般が
 思い描く「大学1年生」とは少し違い、朝早くから練習に向かい、授業の合間も身体のケアや試合の
 振り返りを考える日々。気づけば、大学生活の記憶の大半がグラウンドに結びついています。

初めてア式の活動に参加したのは、3月末の練習体験会でした。
 正式入部前から練習に参加し、5月頃からは少しずつ試合にも絡めるようになりました。大学サッカーの
 強度やスピードに戸惑いながらも必死に食らいつく日々。6月半ばにはBチームで初めてスタメンとして
 出場する機会を貰いました。しかしその矢先のサタデーで負傷し、思いがけず一足早く夏オフになること
 になりました。復帰後、リーグ後期開幕直前にAチームに上がりましたが、そこには自分の想像を遥かに
 超える基準がありました。技術、判断の速さ、強度、すべてにおいて差を痛感し、練習についていくのが
 やっとの日々。週末はBチームで過ごすことが多く、自分の未熟さと向き合い続ける時間となりました。
 4年生引退後は出場時間も増えましたが、最後までスタメン争いに食い込むことはできませんでした。
 冬オフはポジション奪取に向けて準備を進めていましたが、オフ明け直前にプライベートで再び負傷。
 三商戦にも参加できず、現在も完全復帰には至っていません。

こうして振り返ると、順風満帆とは言えない1年でした。

それでも A チームで感じた高い基準や思うようにいかなかった時間は確実に自分の中に残っています。うまくいかない経験をしたからこそ自分に足りないものが明確になり、「もっと上手になりたい」、「このレベルで戦いたい」という思いは強くなりました。去年は三步進んで二歩下がるような1年でしたが、ひとつの経験が自分を前に進めてくれたと感じています。来年度からは学年が1つ上がり部の運営にも関わる立場になります。これまでのように自分のことだけに集中するのではなく、チーム全体を考えながら行動する責任が生まれます。チームスローガンである「総勢、一意専心」のもと、個人としても組織の一員としても成長し、結果で貢献できる1年にしたいと思います。

最後になりますが、一橋大学ア式蹴球部は今季、東京神奈川2部リーグで戦います。

1部からの参入チームも多く、厳しい戦いが予想されますが、チーム一丸となって昇格を目指します。今後とも温かいご支援・ご声援のほど、よろしくお願いします。



海外便り

🌐 ナマステ from 西インド

山木 達生 (昭 59 卒) Murakami Manufacturing India



卒業後、トヨタ自動車に就職しカナダ、トルコ、イギリスに数年ずつ駐在。
 愛知製鋼を経て2022年より自動車用バックミラーのメーカー村上開明堂に転職。
 そして2025年4月から63歳にして、ガンジーやモディ現首相の出身地でもあるインド北西部の
 グジャラート州に単身赴任しています。インフラ整備が進み（港湾・道路・新幹線など）、インド国内で最も
 経済と産業の発展が著しい州です。私の生活拠点は、州都アーメダバードの空港から車でガタガタ道を
 2時間走ったところにあるヴィタラプール村。牛・犬・ヤギ・ラクダに囲まれた天然のサファリパークで、
 ベジタリアン・ノンアルコールの生活を続けています。



《生活環境と仕事場》

予防接種を12発接種して来ましたが、目つきの悪い痩せ犬が沢山いて行動範囲は限られています。とは言っても、ヴィタラプール村周辺には Mikado Japanese Hotel や Hotel Sunmarks など多くの日本人向けのホテルが点在し、Family Mart も1軒あり、さながら“日本人村”のようになっていて、ホテルのレストランで日本食も食べられます。私が住まいとしているのは The Orange Zest Hotel。朝食付シングルで3000ルピー（約5100円）。デリーでは1万円以下のビジネスホテルはありません。毎朝提供されるヤクルト1本は“今日も頑張るぞ！”って気合いが入ります。夕飯はえび天ぷら定食やカツ丼 550~600ルピー（約840~1000円）。私は洗濯や朝夕食事付で契約しています。



村上開明堂のインド工場は、ホテルから車で10分のマンダル日本企業専用工業団地内にあります。昼食は従業員たちと一緒に社員食堂で食べます。彼らインド人の仕事ぶりについては、西松会新聞第6号に寄稿された畑 弘志さん（昭58卒日本鋼管勤務）のご意見にまったく同感です。

“インド人は言い訳の天才で湯水の如くへ理屈が登場、真の原因追及は不可能で常に応急処置となる。No Problem Sir が口癖だし喋りっぱなしで辟易する。しかしながら実は根はいい人たちで、比較的親日で年配を敬い、本当に憎めない人たちでもある”・・・

例えば、採用面接で自分の強みを具体的な事例で説明してくださいと聞くと、延々と主語がない業務の説明を話し始める。また取締役会の議事録をA4用紙1枚で簡潔に書いてと指示すると10枚ベタ打ちで出てくる。何でって聞くと、これがインドの会社法に基づく議事録だと。子供の頃からの教育と訓練で聞かれたことに対しては頭の中にある事をすべてダウンロードするのが正解、“沈黙は金”ではなく“沈黙は禁”と教えられていると推察します。



《スポーツ事情》

インドにもプロサッカーリーグがありW杯予選に参加していますが、メディアを通じてサッカーネタを見聞きする機会はありません。男子も女子もクリケット一択です。近郊の工業団地内でも組織だった大会が運営されていて、メンバーも熱心に練習して臨みます。普段の仕事でも、これだけ計画的に声を掛け合って一生懸命やってくれたら相当な力を発揮してくれるのにと彼らのポテンシャルを感じます。



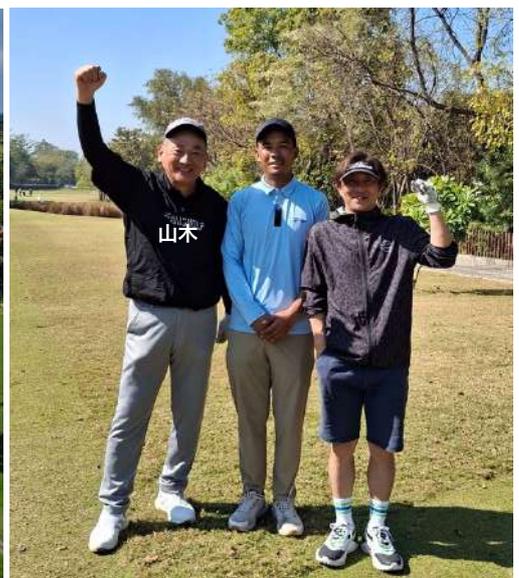
《ゴルフと日本人会》

さて私の日常は、週6日稼働する工場とホテルの往復のみ。

唯一のリセットポイントが同じ環境で暮らすオヤジたちとの日曜日のゴルフです。

下の写真は車で2時間弱の Kensville Golf club でブータンのプロゴルファーとプレイした時のもの。

トーナメント前のプロの練習ラウンドと一般客が交流できるところにインドの大きさを感じます。



アーメダバード日本人会（250名規模）が主催する隔月の懇親会、忘年会、春秋のゴルフコンペ、週末の部活動（テニス、ヨガ、剣道など）も楽しみにしているイベントです。特別な環境で暮らす同士たちが気軽に日本語で語り合える機会を数多く提供くださった先人たちに感謝しています。なお昨秋のコンペではメンバーとハンディキャップに恵まれ、初参加で初優勝することができました。



山木



2025. 12. 7 Gulmohar Greens にて

アーメダバード日本人会の忘年会 95名参加

ひとつ嬉しいニュースがありました。
 すでにインド進出を果たしている創業 120 余年の
 讃岐うどんの老舗「石丸製麺」のインド責任者が、
 2 月下旬に市場調査のため当地を訪問してくれました。
 この石丸製麺の社長が、一橋サッカー部で
 私と同期だった石丸芳樹さん。伊藤忠商事を経て
 家業を継承し、社長業を 22 年。次を担う後継者の
 長女と三女は、共に一橋女子ラグロス部出身！
 ヴィタラプール村で石丸製麺の讃岐うどんを
 食べられる日を待ち望んでいます。



石丸芳樹 社長

インド向け
讃岐ラーメン / 讃岐うどん



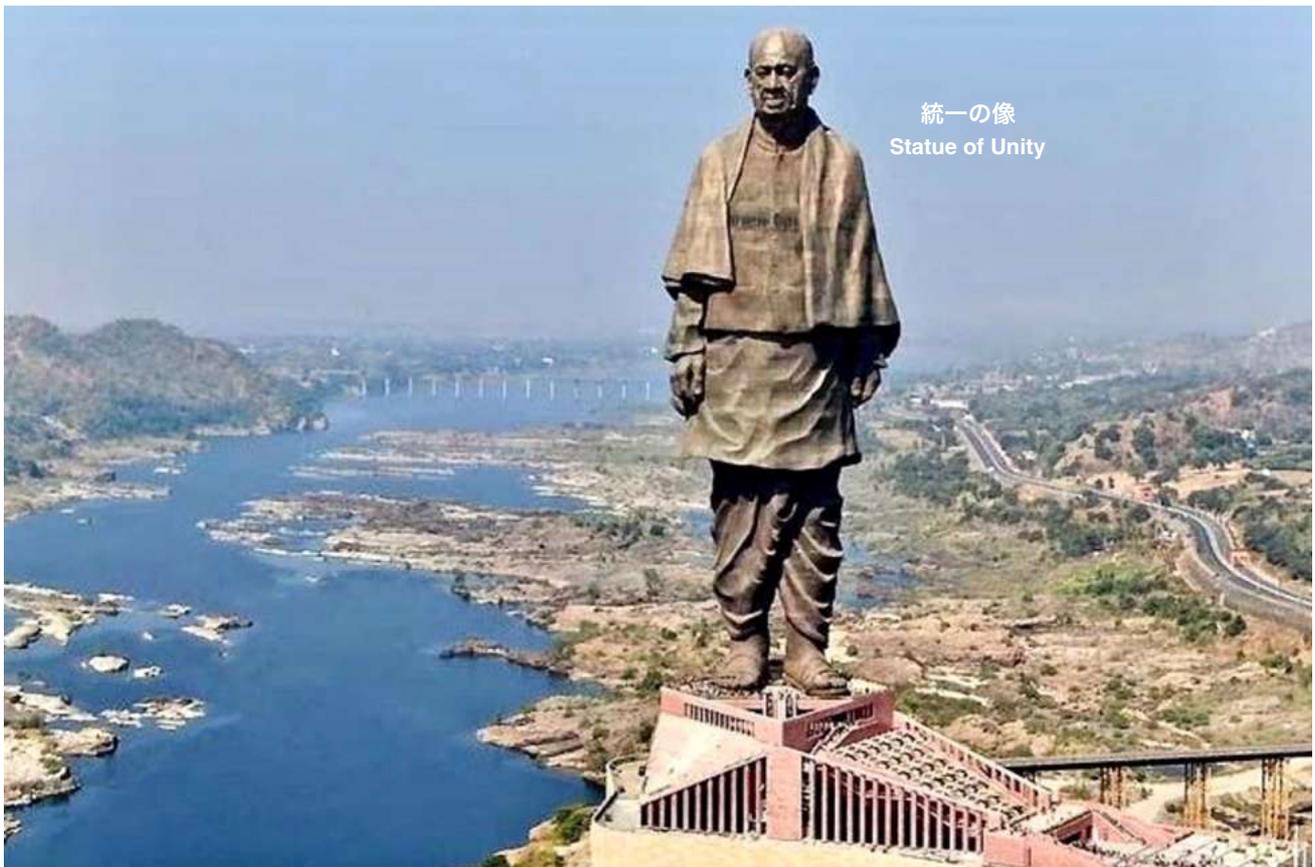
日印食文化を語る会 ～人類は麺類～



石丸製麺
田原 事業部長

《観光地》

インドに来た当初、ゴルフ道具の到着を待つ間にアーメダバード近郊の観光地を訪問しました。大きなダムを見下ろす世界一の高さ 184m の統一の像、朝日が真横に突き通すサン・テンプル、ガンジーさんが活動拠点としたガンジー・アシュラム、世界遺産の階段井戸 ラニ・キ・ヴァヴ、仏建築家ル・コルビュジェの建築物など、移動距離が長く、気力・体力が必要です。



統一の像
Statue of Unity

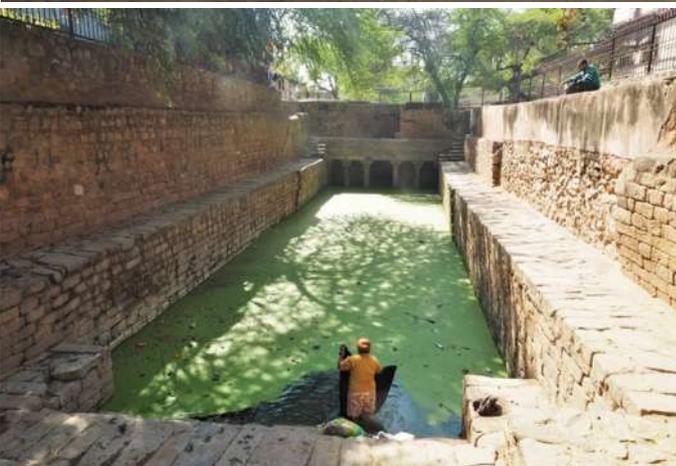
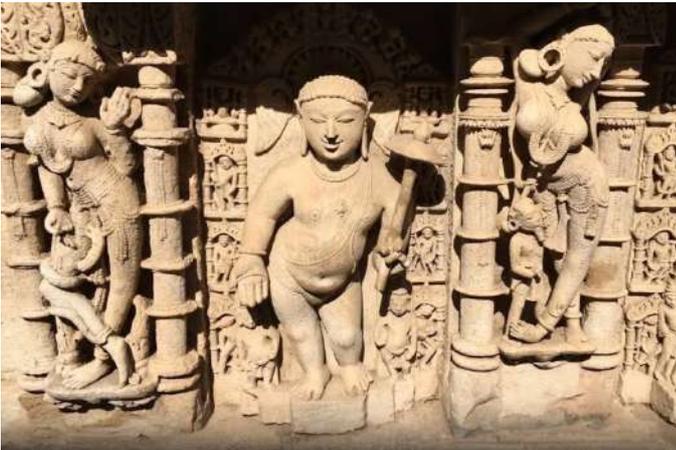


Modhera Sun Temple

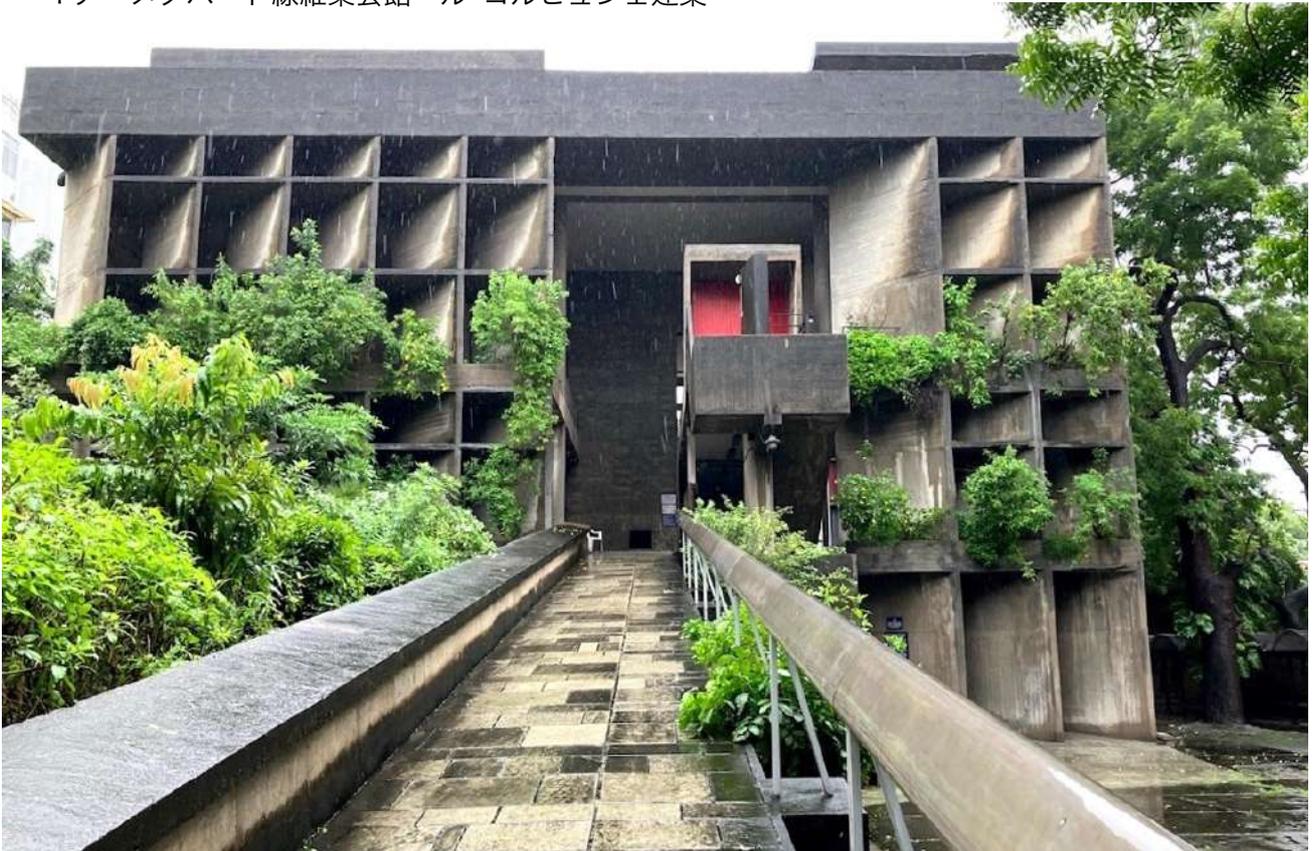


Gandhi Ashram

＊世界遺産：王妃の階段井戸 Rani Ki Vav



*アーメダバード線維業会館 ル コルビュジェ建築



《現役の皆さまへ》

インドから無事に帰任の暁には、小平へ応援にうかがいます。
還暦過ぎてインドへ単身赴任するケースもあるという事例紹介でした。
全力で学生サッカーをやり切って、頭脳と心技体を鍛錬されて、
世界の人の笑顔のために大いに活躍されることを祈念しております。

*昭和59年卒メンバー



🌐 ダブリンでの仕事・暮らしの近況

栗津 義一 (平7卒) Willis Mitsui & Co Engine Support
三井物産 航空宇宙部より出向



三井物産に就職後、2015-20年 米国三井物産 (NY)、
2018-23年 アジア大洋州三井物産 (シンガポール) を経て、2025年6月より
投資先の在アイルランド航空エンジン・トレーディング&サービス事業会社の
責任者としてダブリンに赴任。成人した息子2人は日本で巣立ち、現在は妻と
2人暮らしです。弊社は世界中のエアラインや整備会社向けに航空エンジンの
オペレーティング・リース、トレーディング、整備・修理サービスを提供して
いる合併会社でパートナー企業の米 Willis Lease Finance Corporation 社の
多国籍な仲間と共に日々切磋琢磨しています。

【仕事】

アイルランドは、約750年に及ぶ英国の支配より独立した1920年代以降、
大戦では中立を保ち、戦後の本格的な経済成長の波には乗れず、EU最貧国と言われていました。しかし
過去数十年に亘り政府主導の航空、医薬、半導体、ICTなど特定産業への税制優遇や高い教育水準・制度
設計を展開・持続した成果もあって1990年代後半から2000年代に亘り「ケルティック・タイガー」と
称される高度経済成長を実現。昨今はGDP per capitaで、世界第2位(日本の3.5倍)になるなど、
目覚ましい躍進を遂げています。

小職が属する航空領域においては、アイルランドは数十年に亘り
Aviation Capitalの地位を築き、世界中の航空関連事業会社が
ダブリンに集積しています。赴任後、米欧中東アジア各国の顧客や
パートナーを訪問し、新規契約や投資先の開拓にあたりつつ、
さらなる事業規模の拡大を目指して、企業経営を指揮しています。
在英ウェールズ関係会社である航空アセット・マネジメント事業
会社を含め、連結人員70名を擁する陣容です。仕事の仲間や
取引先と懇意になるための様々なイベントも展開中で、すでに
過去10か月でFly Fishing、ゴルフ・コンペ、サッカー・ラグビー
・オペラ観戦、ダブリン Pub、アイリッシュ Dance ショー等
を通じた交流を計り、信頼・友情を育みながら、厳しくも楽しく
仕事を進めています。



航空エンジン事業



*Fly Fishing



*航空エンジン事業の仲間と英 Wales の首都 Cardiff の Pub にて



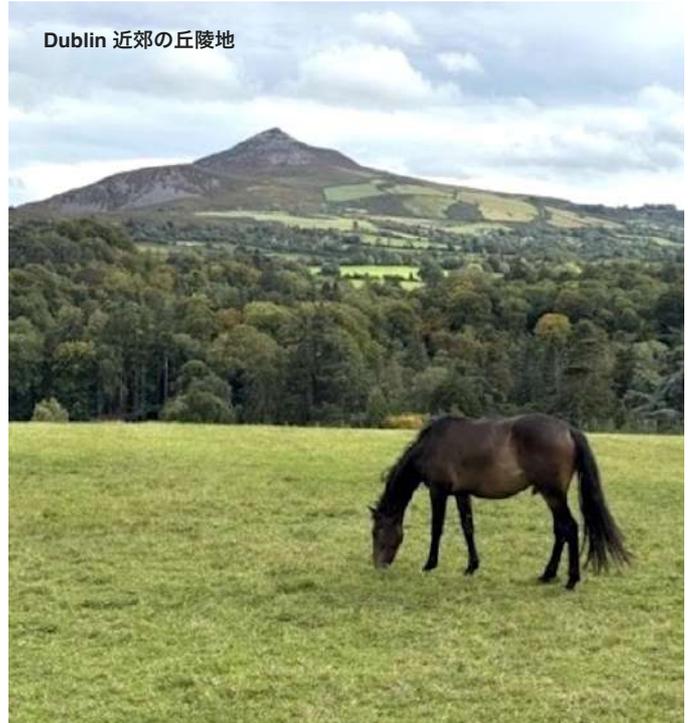
Dublin 旧市街



【暮らし】

アイルランドの第一印象は、緑豊かで落ち着いた、程よく田舎で人々の心が温かい、安全な国。ダブリンの都心は石畳の古びた街並みで1年中観光客でごったがえしていますが、私の住まいは南部のレパーズタウンという新興開拓地区のマンションを選びました。

車は左側通行、左ハンドルで日本・英国式。時代に逆行？並走？してディーゼル式の英車 Land Rover ディスカバリーで買い物や旅行をしています。通勤は LUAS と呼ばれる路面電車で15分ほどの距離で都心のオフィス街に週3-4日出勤しています。10分も走ると、北海道のような景色が広がる牧歌的でのどかな生活環境です。



Dublin 近郊の丘陵地



路面電車 LUAS



Leopardstown 競馬場

アイルランドは英語と母語ゲール語が公用語の国で最初の数か月は、極めて早口のアイリッシュ英語の訛りに耳を慣らすのに時間を要しましたが、何とかやっています。自身が1970~1980年代、小1から中2まで米国とタイで過ごした帰国子女ゆえ、米国やアジアは第2・第3の故郷として土地勘や親近感があるものの、欧州は何もかもが新鮮で、知的好奇心を毎日くすぐられています。

【おすすめのグルメ】

アイリッシュ・ビーフ、ポーク、ラムが美味、生カキ、貝、シーフードが新鮮です。牛乳、チーズなどの乳製品、ハム、ソーセージ、野菜などスーパーで買い出し、自宅で調理し、ビール、ワイン、アイリッシュウイスキー、コニャック、ジンでゆっくり過ごすのが何よりの息抜きになります。ステーキハウス、シーフード、中華、タイ、ベトナム、フレンチ、イタリアンなど、美味しいお店も多いのですが、円安の影響もあり、なかなか高くなります。悩みは美味しい日本食レストラン、そもそも充実した日本食材店がないことです。ダメ元でラーメンをお店で食べ続け、失望し続けた挙句、自分で作るしかないと決意。粉から麺を打ち、地元スーパーで捨てている鶏ガラから数時間煮込み、自前のスープを作って食べています。が、奥深過ぎにて、まだまだ味はイマイチ。

*新鮮な生ガキ



*自作の手打ちラーメン



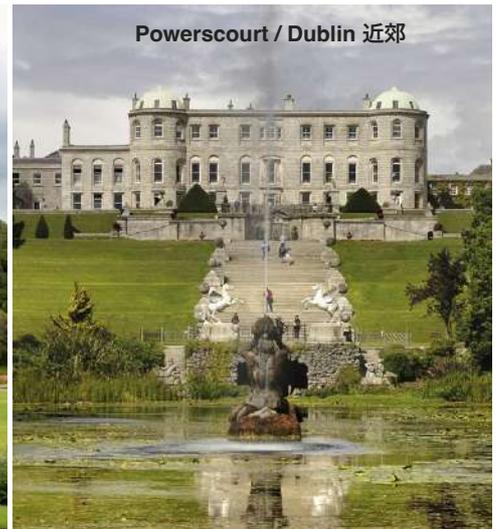
【観光スポット】

海外出張が多く、国内旅行にそれほど行けていないものの、約750年に亘り支配を続けた英国の貴族が住んでいた豪華絢爛な邸宅や、西部 Galway 近くの有名な「モハーの断崖」など、この地方独特の景色や歴史探訪が楽しめます。

Johnstown Castle / 南部 Wexford



Powerscourt / Dublin 近郊



Cliff of Moher



お薦めは 1757 年商業の Kilbeggan ウィスキー蒸留所。

現在はサントリー・グローバル・スピリッツ傘下となりました。ダブリンより 1 時間のバス旅で歴史的な水車つき蒸留所の見学、売れ筋ウィスキーの試飲・解説、蔵出し特注ウィスキーの購入が楽しめます。

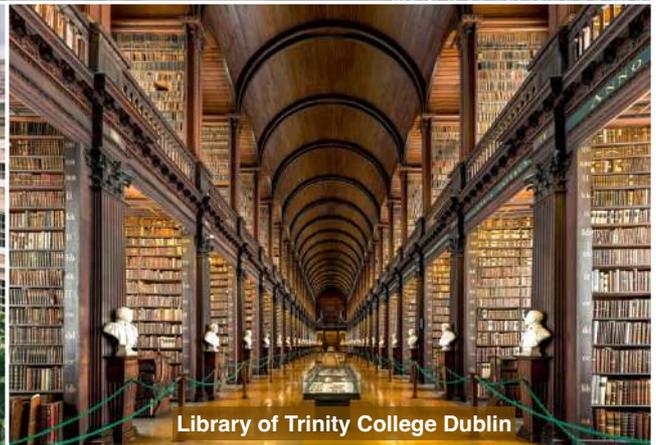


その他、スターウォーズの映画で撮影された聖地が各所にあります。

ダブリン中心にあるトリニティ・カレッジ内の図書館は、ジェダイ聖堂のモチーフになった場所。

スケリッグ・マイケル島は、ルーク・スカイウォーカーが最後の闘いで息絶える隠れ家。

島西部の風光明媚な海岸線と共に駐在中に訪れたいと思っています。





Skellig Michael



Luke Skywalker / Star Wars

【サッカー事情】

在ダブリンの航空業界の企業対抗サッカー大会に2025年11月に参加しましたが、体力不足を痛感、若手の応援に徹しました。アイルランドでは、伝統のハーリングやゲリック・フットボールと共に、ラグビー、競馬、ボクシング、そしてサッカーが大人気です。アイルランドにもプロサッカー・リーグはあるものの、会社の同僚や取引先の多くは、やはり英プレミアリーグや、リーガ・エスパニョーラの試合を毎週追いかけている者が多いです。家族で数世代にも亘り英アーセナルファンとか、死んでもマンチェスターとか、弱くて落ち込んでいるがホットスパーしか考えられないとか、相当な入れ込みようで、少しでもサッカーの話になると皆夢中になるのが興味深いです。



*会社の仲間と出場したサッカー大会

【現役部員へのメッセージ】

1993年5月15日、小職が大学3年の時にJリーグが開幕し、サッカー部の仲間と共に旧国立競技場でのオープニングセレモニーに参加出来ました。メインスタジアムのだ真ん中の上部に控え盛り上がりのピークのタイミングで、大きなJリーグ旗を左右に3-4人ずつ、真ん中の部分を上下で1人ずつ握りしめて広げながら階段通路を駆け下りるといふ仕掛けを手伝いました。10-15m x 7-8mくらいあった巨大な旗で、縦の通路を3本使ったと思います。ピッチまで運ぶことはなく、あくまでメインスタジアムの上部で広げただけでした。当日夜のスポーツニュースで流れたJリーグ旗が広がっていくシーン、そして初代の川淵チェアマンが「100年構想」を打ち立てたことは鮮明に記憶しています。



最近の現役世代は自分の頭で考えて地域住民のサポートを得るための活動に従事したりユニークな発想で活動予算の確保を模索したりと、より広く深い長期的な視野に基づく戦略を試行し始めていて感心しています。また日本に帰還した際に試合の応援に駆けつけたいと思います。

＊平成7年卒メンバー



🏆 マドリッドでサッカー三昧

諸石 央 ^{ひまし} (平 12 卒) Astara Mobility S.A. (三菱商事から出向)



2024年3月より三菱商事から在スペイン/マドリッドの企業に出向中です。ちょうど赴任して2年が経った、このタイミングで海外便りを寄稿する機会を得ましたので、近況を報告させていただきます。



スペインでの仕事

Astara Mobility S.A.は、本社をマドリッドに構える自動車卸売販売事業会社（設立 1979 年）で 19 か国で 41 ブランドを扱っています。従業員はマドリッド本社が 180 名、連結で 2,900 名規模。三菱商事は 2020 年に参画し出資比率は 21%、筆頭株主はスペイン複合企業 61.7%です。三菱商事から自分を含め 3 名がスペイン本社、もう 1 名がチリ子会社に出向中、自分ともう 1 人の先輩出向者は、CEO に直接レポートする経営補佐的なポジションに就いています。三菱商事モビリティグループは、ASEAN や豪州といった特定国で特定ブランドの事業を 30~40 年かけて構築してきた組織で、Astara 事業は同社の成長を通じて今後の新しい自動車販売事業を構想する、といった位置付けですが、現場では同僚・部下も 1 人もおらず、黙っては何も情報が入って来ない、自分で行動を起こさないと 1 日ひと何も言葉を発さずボーっと過ごすことになりかねません。



自分は三菱商事のコーポレート財務経理部門の所属で、本社コーポレート部門や各営業Gで20年に渡り様々な業務に従事、うち2013年～2018年はシンガポールの金属資源トレーディング事業子会社を設立するタイミングで出向し、日本人や多国籍のプロ人材と一緒に事業・組織をイチから作る経験をしましたが、同じ事業投資先への出向でもシンガポールと今では全てが異なり、過去とは全く違う行動・思考回路・筋肉が求められる中で自分なりに奮闘する日々です。

子会社では、同僚や顧客も自分の後ろに日本本社や現地CEO（同じ日本からの出向者）を見て言動を尊重してくれるところがある一方、Astaraでは自分が何を言うか何をするか、シンプルに個人が見られていると語った出張者がいましたが、確かにAstaraのスペイン人が、遠い日本のマイノリティ株主を想像して自分を尊重してくれるわけはありません。その中で自分がどのように貢献できるか、暗中模索して早2年が経ちますが、「事後対応・対処療法」で事業管理してきたAstaraは変化の激しい自動車業界の中で厳しい局面にあり三菱商事・日本が重視する「事前予防・根治療法」の発想を取り入れ財務分析により本社の事業管理を強化すべく取り組んでいます。日本でも最近流行りのFP&A = Financial Planning & Analysisのような役割です。面白いのは、スペイン本社と子会社の関係性が、地理的に遠い南米は良く、近い欧州は悪いことです。南米はスペインが旧宗主国、同じスペイン語で会話でき価値観が近く統制も効いている一方、欧州はベルギー・ドイツ・ポーランド・フィンランド等、スペイン人と話が噛み合っていない、相手が本社の言うことを聞いていない、とよく感じます。全てスペイン人が悪いわけでもなく、「同じ基準で話ができている」ことが多々あり、数字に基づき同じ言語で会話するための仕組み作りに取り組んでいきます。ここで、参考までに

スペインについて

参考までに、スペインと日本の主要な基礎情報とスペインの世界・EUにおける位置付けを纏めてみました。

指標	スペイン	日本
国土面積	約505,000 km ²	約378,000 km ²
人口 (2026)	4,950万人 (EUで4位)	1億2,240万人
人口密度	約98人 / km ²	約337人 / km ²
高齢者割合	20.91% (2025)	29.3% (2024)
移民構成	外国出生者 1,000万人超 主にコロンビア、ベネズエラ、モロッコ	人口の98.5%が日本人 移民は極めて少ない (韓国 0.5% 中国 0.4% 等)
名目 GDP (2026 IMF 推計)	2.04 兆 USD (EUで4位) ・ ・世界ランク 12位 (2025)	4.46 兆 USD ・ ・世界ランク 5位 (2025)
GDP成長率	+2.3% (実質、EU予測)	+0.7% (暦年、民間研究機関予測)

【補足事項】

*国土が広大な分 気候も多様で マドリッドを含む中央部は乾燥・寒暖の差が激しい「大陸性気候」バルセロナ・バレンシアなどの東部・南東部は夏は 非常に暑く乾燥し冬は温暖で降雨量が多い「地中海性気候」北部のガリシア・バスクは 温暖で湿潤 かつ雨量が非常に多い「大西洋気候」北東部のピレネー山脈地域ではウィンタースポーツも楽しめる

*スペインの人口は増加傾向にあり過去最高の 4,950 万人を突破 (内 1,000 万人は外国生まれ)

*スペイン語は世界で 2 番目に多く使われる言語で中南米を中心に広大な文化的・経済的影響力を保持

*アラブ及びアフリカとの文化的・歴史的つながりが深くアラブ世界とも緊密な関係にある

*スペインのソフトパワー：美食・観光・芸術・映画・スポーツ (LaLiga)

*スペインの多国籍企業：インフラ・クリーンエネルギー・観光・銀行・テレコム・ファッションなどの分野で優位性を誇る

スペインでの暮らし

スペインは 2024 年時点で 50 件の世界遺産 (文化遺産 44、自然遺産 4、複合遺産 2) を有する観光大国ですが、うちの子供たち (12 歳の娘と 8 歳の息子) は、まだ芸術・歴史・文化にはあまり興味を示さず国内旅行でスペインを満喫するには中学生・高校生くらいがベストかもしれません。日本同様にスペイン料理も地域差があり、旅行先ではそれぞれの地域料理が堪能できます。スペイン料理は素材の味を大事にし、塩・胡椒・オリーブオイルによる比較的シンプルな味付けが地域を問わず好まれます。長く暮らしていると少し飽きてくる面がありますが、スペイン料理愛が強いのか他国の料理への探求心・ニーズがやや弱く、例えばマドリッドで美味しいイタリアン・中華・タイ料理は？というと、あまり思い浮かびません。発掘しきれていないだけかと思いますが。我が家はヨーロッパにいる間にといいことで、他のヨーロッパの国や文化的にも近いモロッコに休みの度に出かけて、地の料理を楽しんでいます。ドイツやフィンランド、フランスの整備された公共インフラ、新しく洗練された街並みに触れた後で、比較的街並みが古いマドリッドに戻ってくると、「そりゃ自国より遅れたスペイン本社の言うことを聞く気にならないのも無理ないな」と思ったりします。何処かのんびりした感じがスペインの不思議な魅力でもあります…。

*イタリア：ローマ「真実の口」

*フィンランド：「サンタ村」

*モロッコ：「ラクダ砂漠ツアー」



*私の好きなタパス (小皿料理) : ピリエントス / 生ハムとトマトのパン



サッカー三昧の日々

最後によくサッカーの話ですが、出向先の Astara がリアル・マドリードのホームスタジアムであるサンチャゴベルナベウのVIPルーム(20名規模)を接待用に年間契約しており、人数に余裕があると「行きたい?」と誘われて、顧客や社員に交じって観戦しています。通算7試合くらい既に行かせて貰いましたが、マドリードダービーやクラシコ、2024年には、チャンピオンズリーグのマンチェスターシティ戦(3対3)を堪能しました。

*サンティアゴベルナベウ・・・2023年9月全天候型ドームスタジアムに改築



*Astara 同僚・出演者と
サッカー観戦

これでは、仕事の大変さを本社に説明しても全く効果がありません（笑）
マドリードダービーには家族で招待してもらいました。また、なでしこジャパンと
スペイン代表の親善試合では、スペインのテレビに家族を映してもらいました。

*2025年2月8日 Rマドリード vs Aマドリード

*2025年5月24日 Rマドリード vs Rソシエダ



*2025年6月27日 国際親善試合：なでしこ vs スペイン 1-3で逆転負け



また、2024年7月にはドイツ開催のEUROを計4試合観戦しました。当時はまだ単身だったので「行くしかない!」と。うち数試合は、日本から来られた長谷川真さんと(平10卒)ご一緒しました。

*欧州選手権ドイツ大会 R16
2024年7月2日 於ミュンヘン
オランダ vs ルーマ

リアル・マドリード試合観戦の甲斐あって？いつの間にか息子がサッカー好きに。通ってるアメリカンスクールのサッカークラブで平日週2回練習、土曜日は地域リーグ戦、日曜日は日本人コーチ開催のサッカースクールと、週4サッカー漬けです。印象的だったのは、子供サッカーの裾野の広さ・自治体支援の幅広さ・プレイスタイルの違いです。息子が所属するクラブはシーズン中ほぼ毎週地域（マドリッド州の市区町村単位）のリーグ戦があります。8～11歳のカテゴリーは、フィールド6人+GKの7人制、20分ハーフ、8～9歳と10～11歳で区切られてます。対戦相手の多くはいわゆる街クラブですが、息子の学校含め、各クラブがカテゴリー毎に複数のチーム（同一カテゴリーで6軍まで有するクラブもあり）を持ち、全ての子供が毎週公式戦に出場でき、州単位・その下の市区町村単位で、クラブへの助成金や施設使用支援など、多様な形で自治体が支援する仕組みが指導者育成や審判派遣を含めて整備されることで、実戦経験の場が提供されています。また、少し広めの公園には、ほぼ確実に立派なサッカーグラウンドが整備されています。サッカーほどではないとしても、バレーボール等、他のスポーツでも同様の仕組みが存在するようで、「サッカーが文化」「スポーツが文化」という考え方を実感します。

*息子が所属するサッカーチーム（右端が息子）



プレイスタイルの違いにも驚きました。

息子が所属するチームのレベルは決して高くないですが、ボールを大事にするが好機には縦に早くボールキープありきのパス回しはしない、守備は相手を遅らせればよしではなく前に出てボールを奪いに行く等、スペインやヨーロッパサッカーのトップレベルと同じゲーム観でサッカーをしていることが見てると判ります。平日含めて基礎技術の練習に割く時間は少なく、実戦形式を通じて体を使ったボール保持の仕方・奪い方・ボールの動かし方といったサッカー戦術を身に着けているようです。結果、成長スピード含め個人差が生じやすいですが、年代毎に幅広いレベルでの実戦の場が用意される仕組みになっており、息子も自分のレベル・成長スピードにあわせてサッカーを楽しんでいます。

ようやく自分自身のサッカーの話です。

マドリッドで開催される各国大使館対抗戦（25年は39チームが参加）、Embassy Cupに2年連続で出場しました。メンバーはサッカー経験者と未経験者が半々といった感じですが、指導者やプレイヤーを志して当地に来られる30代のメンバーが引張る形で、なかなかのレベルです。自分は参加者の中で上から3番目くらいなので、怪我しないこと最優先で今年も参加できるよう、時々サッカーしています。



最後に、三菱商事の同僚からは

「サッカー好きの諸石さんには、スペイン駐在最高ですね！」と、よく言われ、

「仕事の大変さを家族生活やサッカーで、リフレッシュして何とか頑張ってるんだよ」と、言い訳しています。つまりサッカーだけでいうと、最高です。マドリッドにお越しの際は皆さま、是非ともご連絡ください。

*平成12年卒メンバー



🏆 W杯に向け熱気高まるアメリカから

金田 大樹 (平 28 卒) キリンホールディングス



西松会の皆様、こんにちは。2016年経済学部卒の金田です。

私は現在、所属元のキリンホールディングスから派遣されアメリカのミシガン大学ロス・スクール・オブ・ビジネスに留学しております。この度、2026年のW杯開催国の1つであるアメリカのサッカー事情や、現地の学生生活について、写真と共に紹介したいと思います。

■一橋に似ている？ミシガン大学でのMBA生活



私が暮らすミシガン州アナーバーは州内最大都市のデトロイトまで車で45分の、自然豊かで落ち着いたカレッジタウンです。大都市のニューヨークやシカゴのような喧騒はなく、ビジネスや経済分野に強みを持つ州立大学であり、どこか一橋大学が持つ「学問に集中できる実直な雰囲気」に通じるものを日々感じています。



恥ずかしいことに、学部時代はア式蹴球部の活動と仲間との娯楽に時間を費やしすぎたため、その反省を含め、卒業して10年経った今、改めて学び直しの機会を設けるべく、ここアメリカにやってきました。32カ国に及ぶ379人同級生は、米国人か、米国大卒か、日常的に英語を公用語とするような会社で働いてきた人々であり、私の英語レベルは控えめに言っても確実に379番目です。ア式の今の学生は授業にもしっかりと出席し、英語も堪能で優秀な方が多いと聞きますが、私自身は、この半年言語面を中心に毎日が苦勞の連続であり、やはり語学準備や学習習慣は人生の早期に定着させておくべきだったと痛感しています。

学生の多くは転職予備校としてビジネススクールに来ており、私のような会社派遣学生とはモチベーションや獲得したいものが異なる中で、グループ課題を中心にどのようにリーダーシップを発揮するか、また自分の生活や活動の優先順位を見直しながら何が自身への投資として最も効果的なのか、できることは限られていますが、どうか工夫しようと挑戦しています。



*Ross School of Business



*トヨタ式生産方式の授業

ビジネススクールの中での活動自体は、どこの国でも、日本でも、大きくは変わらないかと思います。1年目は幅広い基礎科目を受講し、2年目は自由に授業を取ることができます。私自身は ESG & サステナビリティやデータビジネス分析を中心に関心のある分野の授業をとる予定です。日々の授業は早い日は朝8時から始まり、夜は翌日の予習を行い、1時ごろには寝る感じの生活です。以前はもっとタフだったみたいですが、AIのおかげで予習を効率化できており、この時代の学生でよかったと思う反面スキルアップにはもっと時間を投下しなければとも思うことも多く、教育における適切なAI活用には日々悩まされています。プログラムは7週間単位で進み、1週間のブレイクや週末を使って、課題と家族・同級生との時間のバランスを保つ生活を過ごしています。そのほか、学内ではケースコンペやクラブ活動などの課外活動も多く存在しており、サステナビリティがテーマのケースコンペで学内3位になったり、日本人クラブ主催で日本への訪問ツアーを企画するなどしています。卒業生や教授陣の強力なネットワークにより、ゲストスピーカーが来ることもあり、3月にはユニリーバのCEOを10年務め、在任中に「ユニリーバ・サステナブル・リビング・プラン」を掲げ、環境負荷を減らしつつ業績を倍増させるサステナビリティ経営を実践したポール・ポルマン氏が講演予定など、非常に刺激的な環境です。



*ケースコンペで学内3位

また、渡米直後の昨年 8 月に第一子が誕生しました。

妻は現地の病院で出産を経験してもらったのですが、アメリカの病院は「産後 48 時間で退院」というハードな環境でしたので、そういった違いも日々感じるがあります。



*大学が保有する観戦スタンド付きサッカー場にて

■現地でボールを蹴って感じた、アメリカのサッカー文化

こんな日々の中でも、3歳から始めたサッカーとの繋がりを欠かすことはなかなかできず、ビジネススクールのサッカークラブに所属し、夏はフルコート、冬はインドアでプレイしています。先日、同じ大学のメディカルスクールとの対抗戦があり、ボランチで出場したのですが、開始わずか5分、SBから私への横パスをカットされてカウンターで失点してしまいました。その瞬間、味方のアメリカ人選手から「お前の（ボールへの）寄りが悪いからだ！」と強烈な英語で捲り立てられ、とっさに言い返すことができず、非常に悔しい思いをしました。ピッチ上での自己主張の強さは、ビジネスの場とも重なるアメリカのリアルな一面です。



*ビジネススクールのサッカークラブ

また、驚いたのは女性プレイヤーの多さとレベルの高さです。

体格も良く、小学生からプレイを続けて社会人リーグを楽しむ文化が根付いています。さらに大学のインターナショナルセンターが、月に1度多様な学部の学生を集めサッカーの機会を設けてくれています。言語の壁があっても、さすがに同じピッチにいいパスを出したり、いいインターセプトをすれば、みんな認めてくれる環境です。クラスでは冷たい友達が、一緒にボールを蹴った翌日から話しかけてくれるようになったりと、ボール1個で人と人が繋がれるサッカーの偉大さを改めて実感しています。

観る方のサッカーも非常に熱を帯びています。

大学サッカーの観点ではプロ顔負けの素晴らしい施設を持ち、有料試合を開催していたり、アメリカ人の間ではプレミアリーグが大人気で、時間帯の都合もあり、午後の授業中にこっそり、時には堂々と試合を観戦している学生の姿はよく見る風景です。また、いよいよ執筆時点で残り100日を切ったW杯に向け昨夏はクラブW杯が開催されました。3度目のアジアチャンピオンに輝いた我が浦和レッズがアジアのクラブを代表して出場し、インテルに大健闘するもアディショナルタイムのゴールで逆転負けをしたゲームを生観戦しました。あの日感じた、現役時代のリーグ最終節のような虚しい気持ちは、次のワールドカップで日本がベスト8に進むことで解消されるでしょう。

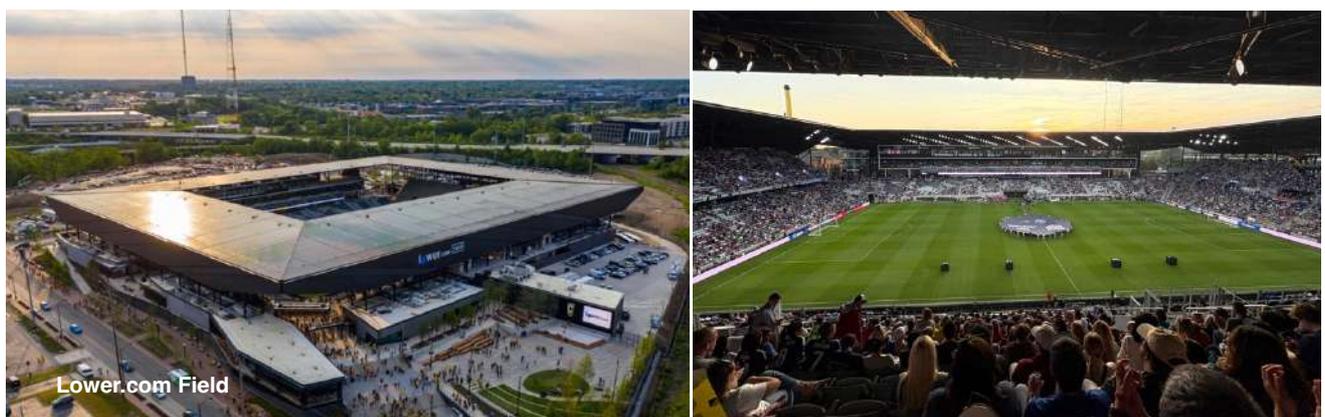


*2025年6月22日 クラブW杯：浦和レッズ vs インテル 1-2

試合会場のルーメンフィールド（ワシントン州シアトル）は2026W杯の会場の1つ

日本代表についてはキャンプ地もテキサス・ナシュビルに決まるなど、着々と準備が進んでいます。

昨秋には米国遠征を実施し、オハイオ州にあるコンパクトだが綺麗なサッカー専用スタジアムで行われた日本代表対アメリカ戦を観戦し、スタジアムの熱気を肌で感じました。（残念ながら0-2で敗戦）



*2025年9月9日 日本 vs アメリカ 於オハイオ州コロンパス



私の通っているミシガン大学は、全米 No.1 の“アメリカン”フットボールの強豪かつ歴史ある大学でして、全米最大（世界3位）のサイズのスタジアムにシーズン中は隔週で11万人が駆けつけます。試合前にはスタジアムの外で繰り広げられる巨大な「テールゲートパーティ（車の荷台などでのBBQやビールパーティ）」があり、試合の日は街中が熱気に包まれます。ちなみに住んでいる町の人口は10万人ですので、州内外から人が集まります。



*ミシガンスタジアムで日本人の同級生と観戦



*バスを使った名物のテールゲートパーティ

そんな“アメリカン”フットボールの国で、トランプに「これからはサッカーではなくフットボールと呼ぶべきだ」とW杯の抽選会で言わせたことは、非常にユーモアのあるこの国ならではのジョークだったとしても、サッカーの米国内での人気を象徴する一言だったのかなと思います。W杯での私の観戦予定は、まだ完全には確定していませんが、日本がグループリーグを突破した場合に有効になる「Round 16」のチケットは既にゲットしました。歴史的なベスト8進出の瞬間を、このアメリカの地で息子と共に見届けられることを心待ちにしています。

最後になりますが、一橋大学ア式蹴球部で培ったタフさを胸に、諸先輩方のように世界で活躍できるビジネスリーダーとなるべく残りの留学生活も全力で駆け抜けたと思うと共に、西松会の皆様および現役学生の今シーズンの益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

*平成 28 年卒 メンバー



【平成27年度（2015）戦績】 東京都2部：5位 9勝1分8敗

対戦→	玉川大	創価	東大	東経	武蔵	日大生資	首都	帝京	成城
春	● 2-4	△ 1-1	● 0-1	● 1-7	○ 4-1	● 1-2	○ 4-1	● 1-2	○ 2-1
秋	○ 3-1	○ 4-1	○ 4-1	● 0-3	○ 6-1	● 0-2	○ 4-0	○ 2-0	● 4-5

*平成 25 年（2013）当時の
小平グラウンド



⚽ ア式初の産科医として

杉本 達朗 (平 18 卒) 徳島大学病院 産婦人科



現在は徳島県の徳島大学病院で産科医をしています。

現役時代の実績は全くの私ですが、卒業後の経歴が珍しいためか、福本編集長に執筆のお声がけをいただきました。卒後 20 年経ちますが、西松会新聞もリーグ戦のハイライトも小まめにチェックしているア式ファンですので、光栄に思い執筆させていただきました。

【現役時代】

入部したのは日韓 W 杯に湧く 2002 年でした。4 学年で 25 人程度の小ぢんまりとしたチームで、戦績も部史の中ではやや厳しい時代であったかも知れません。しかし、毎日全員と話をする機会があり、スタメンから程遠い私であっても疎外感を感じる事のないアットホームなチームが大好きでした。



【平成 14 年度 (2002) 戦績】 東京 3 部 B : 7 位 1 勝 2 分 4 敗 → **東京 4 部 C 降格** → 翌年 3 部 B 昇格

桜美林	玉川大	大東大	朝鮮	山梨学院	農工	外語大
△ 1 - 1	● 1 - 2	● 1 - 2	● 1 - 5	● 1 - 2	○ 7 - 0	△ 1 - 1
9/1 小平G	9/8 小平G	9/15 小平G	9/22 小平G	9/29 小平G	10/6 小平G	10/13 小平G

4 年時は後輩たちのおかげで 2 部昇格と有終の美を飾ることができましたが、自分たちの代がこんな良い思いをして良いのだろうかと思ったり後ろめたさもありました。しかし狭間の世代ではないですが、高宮主将・前田 GM をはじめとする強烈なリーダーシップ・個性を持つ 1 つ上の代にはよく仕え、全君・林君・中島君といったサッカーは上手いが、自己主張も人一倍の 1 つ下の代には極力彼らのやりやすい環境を提供した私たちの代へのご褒美だったと、今は誇らしく思っています。

*平成18年卒メンバー



【平成17年度(2005)戦績】 東京3部B：優勝 6勝1分 → 東京2部 昇格

明星	東工	山梨学院	杏林	大東大	桜美林	日大生資
○ 6-0	○ 4-2	○ 1-0	○ 4-2	○ 1-0	○ 2-1	△ 1-1
9/4 小平G	9/11 小平G	9/18 小平G	9/25 小平G	10/2 小平G	10/9 小平G	10/16 小平G

【医学部再入学・産婦人科医として】

卒業後、5年間の製薬企業勤務を経て、徳島大学医学部に再入学し、現在は徳島大学病院の産婦人科に勤務しています。デリカシーのなさから女子マネージャー陣を度々激怒させていた現役時代を知る方々からは、「あり得ない!」と散々言われていますが、何とかやっています。今回は医学部のサッカー事情、産婦人科としての生活を少しご紹介します。

Q 医者になりたいと思ったのは? 理由は? A: 大学1年の秋季リーグ戦後

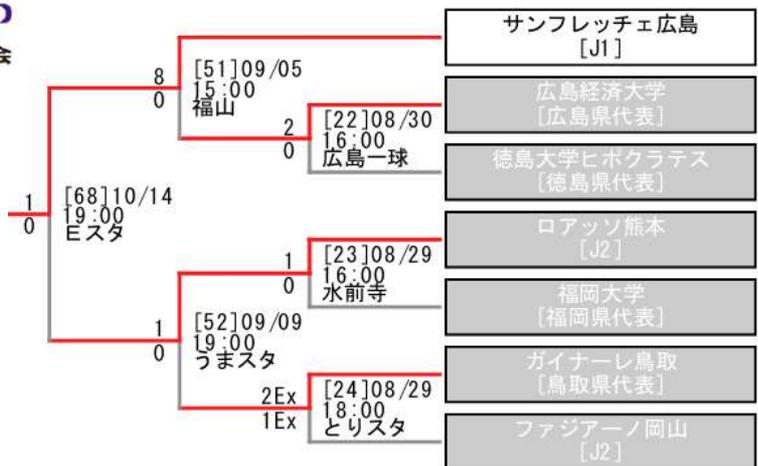
父が医師であり、高校時代は医師になる自分を想像していましたが、2000年前後から医療訴訟が社会問題化したため、父から「医師の時代は終わった」と宣告され、文系に進んだ背景がありました。しかし、どこかで医師になりたい自分もあり、1年の秋季リーグ戦後、主将であった高橋先輩の家で自分の思いを打ち明けました。部活を初めて見学した際、4年生の高橋先輩は男の僕でも憧れてしまうようなカリスマ的な存在感があり、一言一言に説得力がある方でした。高橋先輩からは「もう少しサッカー部で頑張ってみろ」と言って頂き、部活・大学を続ける決心をしました。その後押しもあってサッカー部も最後までやりきり、会社人・医師として2つの人生も送ることができたと非常に感謝しています。しかし、30歳を前に体調を崩したことと東日本大震災が重なり、後悔しないように医学部再受験を決めました。産科医になったきっかけは、学問的な側面もありますが、当時の徳島大学産婦人科の教授が、高橋先輩と同じように「こんな医師になりたい」と思えるくらい尊敬できる先生だったというのが一番の理由です。人に影響されやすい性格のようですが、そのおかげで今の自分があるとも思っています。

Q 医学部サッカーのレベルは？ A：サッカー天皇杯本戦にも出場します！

私が現役の頃は、順天堂大学医学部サッカー部が都リーグ4部に所属していましたが、大差での勝利が当然の相手でした。実はこの順天堂大、当時医学部サッカー界の名門だったりしました。このことから当時の医学部サッカーレベルが伺い知れると思います。しかし、私が徳島大学に入学した2012年に見た医学部の練習光景には度肝を抜かれました。元ガンバユースのレギュラーや日本高校選抜、県選抜レベルの選手が普通にプレイしていました。文武両道はどの世界にもいると痛感させられました。またサッカー界全体の底上げの成果でしょうか、全体的な技術レベルも目を見張るものがありました。医学部4年の時には、医学部の枠を超えてどこまで通用するかを試してみたく徳島県天皇杯予選に挑戦し何と第95回天皇杯本戦に出場を果たしました！1回戦で中国四国大学リーグ上位の広島経済大学に0-2と惜敗しましたが、医学部サッカーの存在価値を示せたと思います。実は下のトーナメント表の通り、あと1回勝てばサンフレッチェ広島との対戦でした。私はコーチとしての参加でしたが、ア式の長い歴史の中でも天皇杯本戦のベンチに座った者は数少ないのではと密かに自負しています。

THE 95th EMPEROR'S CUP
第95回 天皇杯全日本サッカー選手権大会

徳島大学ヒボクラテス (初出場)



Q 医者の日常は？ A：意外にア式の現役時代に似ている！

ご家族に医師がいる西松会員もいらっしゃると思いますが、医者の日常は意外にもサッカー部時代の生活サイクルに似ています。週1-2回手術日があり、その日が週の中心となります。手術の前日には画像や検査結果を見ながら、同僚の医師達と手術に向けたミーティングがあり、手術が終わると上級医と自身の手術動画を見直し、反省・次回への改善点を書き留めます。また業務の合間に腹腔鏡手術の練習などもしています。何となく秋季リーグ戦中の1週間に似ていませんか？

医療をスポーツと並べるとお叱りを受けそうですが、43歳になった今も日々上達を求められる職場は刺激的です。医療面で成長すれば、より規模が大きく高度医療を提供する病院にステップアップできる可能性があるのも、リーグ戦の昇格に通じるところがあると言えば、言い過ぎでしょうか。



Q 産科医になって一番大変だったことは？ A：コロナ禍のお産です。

やや記憶から遠ざかりつつあるコロナ禍ですが、当時のお産の状況を当事者としてご紹介します。この時期にご家族が出産された会員の方もいらっしゃると思います。本当にお疲れさまでした）お産の際、陣痛から来る痛みで妊婦さんは大きな声を出してしまうことが多いですが、その妊婦さんがコロナに感染している場合、お産の現場は幸せなシーンから一転、「3密の現場」（もはや死語に近い・・・）になってしまいます。医療関係者が次々に感染することは避けなければならない、陰圧室などの施設の整ったコロナ感染妊婦さんのお産に対応できる病院は限られていました。当時私が勤務していた香川県の病院は県内に2つしかないコロナ感染妊婦さんの受け入れ病院であり、連日保健所から連絡が入り、妊婦さんが救急車で運ばれてきました。お産は次ページの写真のような感染対策の防御服を着て、特別な部屋で妊婦さんと一緒に長時間過ごします。汗だくになりながら感染の恐怖とも戦い、生きた心地はしませんでした。無事赤ちゃんが産まれてきてくれた際の安堵感は筆舌に尽くしがたいものがありました。



幸い私も妊婦さんから感染することはなく、赤ちゃんにも感染者は出ませんでした。ワイドショーなどでは日本のコロナ対策の批判なども散見し、振り返れば改善すべき点もあったかも知れませんが、しかし直面したことの無い未曾有の状況に、短時間で組織化され、ほぼ徹夜で業務に当たっていた保健所や、黙々と働く医師以外の医療スタッフの姿に、日本人としての底力をみましました。なお、現在はお産の現場もコロナ禍以前の落ち着きを取り戻しています。

Q 産科医としての一番の心配事は？ A：少子化は止まらない・・・

西松会員の多くの方が住まれている東京はタワーマンションが立ち並んでおり、少子化のニュースはどこか他人事かも知れませんが、地方は深刻です。右のグラフのように徳島県の出生数は、この10年で激減しています。分娩をとり辞める病院・学校の閉校が相次いでおり少子化を肌で感じています。徳島県西部には50年後、人は住んでいないのではないかと感じたりしています。

そして年齢分布からも少子化に拍車がかかるのは自明の事実です。産科医はある意味一労働者に過ぎず、眼の前のお産に全力で対応することしかできません。少子化に対応した社会設計や少子化の改善策などは社会を動かす役割を担っておられる西松会員の方々に是非お願いしたい次第です。

徳島県の合計特殊出生率と出生数の推移



【現役部員の方々へ】

いつも全力で組織運営・試合に取り込んでいる姿、遠い四国からも本当に頼もしく眺めています。試合のハイライト映像などの作成、大変だと思いますが、四国にいてもサッカー部との繋がりを持っていてるようで毎回楽しみに見えています。どうか今後も続けて下さい。そして卒業後もサッカー部や同期・先輩・後輩との関わりを是非持ち続けて下さい。ありきたりですが、サッカー部の仲間は私にとって一生の宝物です。



*平成18年の卒業アルバムより拡大抜粋

🏀 ホームタウン国立でのワインバル奮闘記

上田 友紀子 (平3 津田塾大卒)



平成3年卒業のマネージャー、上田友紀子です。

この度僭越ながら、学生時代を過ごした国立でワインバルを開業・経営した話をお伝えする機会をいただきました。OBの皆さんの多くは大手企業で勤め上げていると思いますが、ちょっと変わった経歴の私の奮闘記を面白可笑しく読んでいただくと嬉しいです。

【学生時代】

大学入学時、何らかのサークル(コミュニティ)に所属したいと思っていた折、一緒にマネージャーを務めることとなった副田尚子さんから、サッカー部のマネージャーの見学に誘われ、付き添う気持ちでついていきました。自分の性格を考えると、マネージャーとして支えるより、自分がプレイしたい方だったので、まさか自分がマネージャーになるとは思ってもいませんでした。しかし練習後、夕食をご一緒し同期部員の歓迎ムードと友好的な雰囲気にかかれ、軽い気持ちで参加することになったのです。ちょうど部室がご近所だったアメフト部のマネージャーの皆さんとの交流でマネージャーの役割や仕事についての勉強会やテーピング講習会が開催されるようになり、昭和のイメージのお飾り的なマネージャーではなく、よりプレイヤーが安心してプレイに専念できる環境づくりをするという役割が明確になったと思います。部員以上にグラウンドに立っていた先輩マネージャーの存在も大きいです。私は腕力が強いもので、私のテーピングはきつくて痛いという部員と、私のしっかり絞めたテーピングを気に入ってくれる部員もいたりしてやりがいも感じていました。もちろん飲み会でも交流を深めてきましたが、ここでは割愛させていただきます。かなりハードだったとだけ、触れておきます。

在籍中、1年次は1部昇格まであと一步のところまで行ったり、3年次は3部に降格、4年次では入れ替え戦で2部昇格を逃すという幾つかのドラマチックな時を部員と共有しました。

それがいつのまにか強い仲間意識となり、卒業し、それぞれの道を進み疎遠になったりしても、今でも信頼し合える関係性を築くことにつながったのだと思います。

昭和 62 年 (1987)	2 部	3 位：2 勝 3 分 2 敗
昭和 63 年 (1988)	2 部	5 位：2 勝 2 分 3 敗
平成 1 年 (1989)	2 部	最下位：0 勝 2 分 5 敗
平成 2 年 (1990)	3 部 A	優勝：5 勝 1 分 1 敗

【後列左から】旧姓(卒年)

- ・副田尚子(平3 津田塾)
- ・上田友紀子(平3 津田塾)
- ・平山陽子(平2 お茶の水女子)
- ・漆原律子(平1 津田塾)
- ・池田陽子(平3 実践女子)
- ・松本園子(平3 一橋)
- ・福田博美(平2 津田塾)

【前列左から】

- ・鈴木志野(平2 実践女子)
- ・大倉容子(平4 実践女子)
- ・岡田真紀子(平4 一橋)
- ・阿部みゆき(平3 一橋)
- ・石橋美佳子(平4 一橋)





【中列 5名 左から】旧姓 (卒年)

- ・ 鈴木志野 (平 2 実践女子)
- ・ 岡本 正 (平 3)
- ・ 福田博美 (平 2 津田塾)
- ・ 上田友紀子 (平 3 津田塾)
- ・ 川腰佳三 (平 3)

【前列】(卒年)

- ・ 本橋 聡 (平 4)

【後列 2名 左から】(卒年)

- ・ 栗谷信裕 (平 1)
- ・ 西川一郎 (平 2)

【中列 5名 左から】旧姓 (卒年)

- ・ 岡本 正 (平 3)
- ・ 上田友紀子 (平 3 津田塾)
- ・ 赤井信彦 (平 3)
- ・ 福田博美 (平 2 津田塾)
- ・ 岡田真紀子 (平 4 一橋)

【前列 3名 左から】旧姓 (卒年)

- ・ 石橋美佳子 (平 4 一橋)
- ・ 鈴木志野 (平 2 実践女子)
- ・ 大倉容子 (平 4 実践女子)



【サラリーマン時代】

卒業後、最初に就職したのは、JTBグループの国際会議運営会社でした。

主に、国際会議の同時通訳のコーディネーターや国際会議の運營業務を務めました。小さい会社ゆえ裁量権もかなりもたせてもらい、刺激的な体験を数多くさせてもらいました。その後、一社転職を経て、外資系ITリサーチ企業で、コンファレンスマネージャーを9年経験しました。ここまでのお仕事は、全て、コア（基幹）のコンテンツやビジネスを支えるいわゆる「橋の下の力持ち」的な役割でした。メインプレイヤーを影で支えるという役割は、マネージャー時代の経験が役に立ちました。大きなイベント成功の陰には、沢山の準備が必要な訳で、やりがいもありましたし、達成感もありました。ただ、「コア（基幹）」を支えてばかりでコアのない自分に次第にモヤモヤするようになりました。

そんな折、プライベートで没頭していたワインの資格試験を受け、

日本ソムリエ協会のワインエキスパート（ソムリエとほぼ同内容だが、飲食業に従事していない場合に与えられる呼称）に合格したのです。その後、飲食店でソムリエさんと会話していても自分の方が知識や洞察が上だと感じる機会が頻繁にあり、もしかしたらこれこそが私のコアなのではないかと感じるようになりました。いつかは自分のパフォーマンスがダイレクトに返ってくるフリーランス的な仕事をしたいなと思っていましたが、何をすることがずっとなかったもので、ワインに出会えて、これだ！と思った訳です。

【国立でワインバル開業】

さて、いざ開業ですが、物件探し、コンセプト、開業資金など、準備期間は半年におよびました。場所は最初から国立と決めていました。実は開業する8年前に国立に引っ越してきていて、国立の良さを十分わかっていたからです。国立だからこそ需要がある、文教都市ならではの治安の良さなど条件は揃っていました。当時、国立では美味しいワインが楽しめる場所はコース料理を提供するフレンチやイタリアンのレストランがメインだったので、カジュアルに1, 2杯ワインを楽しむバルスタイルのお店は絶対喜ばれると思っていたのです。そして遂に2010年10月「ワインバル ulalaca kunitachi」のオープンを迎える事ができました。それまでのプロジェクト管理の経験を活かして準備スケジュールやチェックリスト、購買リストなど作って進めていましたが、企業であれば、文具や備品は総務に行けばあるけど、メインの道具はもちろん全ての準備を自分でしなくてはなりません。資金調達、予算、施工、許認可、デザイン、メニュー開発、値付け、マニュアル作成など、これまでも数千人規模のイベントを毎年運営してきた私でしたが、これほどハードなイベントは、これまでありませんでした。



そしてイベントだったら数日したら終わるのですが、飲食店開業は、そこから始まる訳ですので、最初は本当に途方に暮れました。でもやるしかない！自分の一番の強みは、ユーザーとしての経験、目線だと思っていました。私だったらこんな商品、サービスがほしいとか、こういうところがユーザーとしては不便という目線です。それが功を奏してスタートは、まずまずの滑り出しでした。

しかし、そこへ半年後の3/11。東日本大震災発生。

計画停電に外食ムードの低調。これまでのサラリーマンでは経験したことがない、世の中の情勢で日々の収入が左右されるという洗礼を受けたのです。

従業員にも苦労しました。飲食経験の長い方にとって、私は非常識な人だったのです。学ぶべきところは学んだとしても、それでもユーザー目線を曲げることはできませんでした。ユーザーの立場に立てない料理人は去り、途中からは、アルバイトの助けを頼りに料理も自らがやっていた時期もありました。ただ、そのうちにお店のファンだった人がスタッフになってくれたり、最終的には右腕と言えるパートナーに出会うこともでき本当に人に恵まれたと感謝しています。アップダウンはありましたが収入は減ってもストレスは前職比 90%減だったこと、自分のプロデュースした商品やサービスがお客様に喜ばれる、そしてコミュニティも形成され、パーフェクトではないですが自分の思い描いていた情景は訪れつつありました。

そして 2020 年。新型コロナの流行。

飲食店には大打撃でしたが、幸い支援金などで生き延びることはできました。ちょうど 10 周年の行事を企画していたタイミングでコロナ渦となったため、クラウドファンディングを実施したところサッカー部 OB の同期先輩がこぞって支援してくださったのです。大学を卒業して 30 年近く経過していたのですが飲食店が大変という報道に皆さん心配してくださり、卒業以降一度もお逢いしていない先輩まで支援してイベントに来てくださいました。本当に感謝です！

飲食店経営の難しいところは、高品質な商品提供とお客様の満足感が、必ずしも自分の収入増や生活の安定 (Quality of life) に直結しない点にあります。小規模店舗で脱サラの途中参入の身にはハードルはより高く、仕事とプライベートの境界線がほぼない生活において、ライフワークバランスをうまく取ることは難しかったのです。年齢と共に夜間の業務もきつくなりました。そして、この年齢になったら、やはり健康第一。まだ再出発できるギリギリの年齢と感じた昨年末、15 年間の営業にピリオドを打つことにしました。この間それまでのサラリーマン時代では出逢うことができなかった素敵なお客様、スタッフ、お取引様に会うことができ、様々な体験もさせてもらい、セルフプロデュースという点では大満足です。本当に感謝しかありません。そしてサッカー部の先輩同期後輩の皆さんにも沢山支えていただきました。大小のグループで来てくれたり、ゴルフ帰りに寄ってくれたり、ゼミの OB 会で使ってくれたり、国立周辺の友人に紹介してくれたり。最近は OB 幹事会の会場としても使っていただきました。現役で一緒に過ごしたのはたったの 4 年。卒業してから 30 数年、こんなに時を超えても今尚応援してもらえたのは、やはり現役時代に過ごした時間が宝物だったからなんだなー。心底そう感じました。本当にサッカー部のみんなとの出逢いと一緒に過ごした日々感謝！これからもよろしくお願ひします！

*閉店記念パーティーに集まった平成ヒトケタ年代卒の OBOG



私の学生 LIFE

🏠 我が家

堤 翔太（4年MF） 熊本県立熊本高



私は、これまでの学生生活で3回の引越しを経験しました。1回目は、入学と同時に小平寮への入寮。初めての一人暮らしはとても楽しかったですが、慣れない家事や部活・学業との両立に苦労したことを覚えています。小平寮ではキッチンやシャワールームを共同で使用するため困ることも度々ありました。衝撃的だったのは、自分のフライパンが使用済みの状態で共用キッチンのシンクに放置されていたときです。この時だけは流石に心が折れかけましたが、同じA棟に住んでいた塚本悟大先輩（のりひろ 令7卒）に、ひとり暮らしのコツや3階の住民について教えてもらいながら貴重な経験ができた2年間だったと思います。



2回目は2年次の冬、小平寮から少し離れたところにあるアパートに引越ししました。家を探して、家具を揃えて、全部自分で準備するのは単純に楽しかったし、そうやって作った空間での生活は、寮より「自分の家」感があって充実していました。この時、電子ピアノを購入しました。またグラウンドから離れた場所に住むようになって、生活にメリハリがつくようになった気がします。ピアノは小学校1年から習っていて、耳コピで邦楽を演奏するのが得意です。自炊や掃除にも慣れ、自分の生活に余裕が生まれたこともあり、サッカーに対する向き合い方が、いい意味で変わったと思います。



3回目は、奨学金でご支援をいただいている竹中育英会の学生寮（練馬区）です。部活引退のタイミングで、グラウンドの近くに住む必要がなくなったため、生活費を抑えられる寮への引越しを決めました。育英会の母体が建設会社ということもあり2年前に改築を行った寮は非常に綺麗で1ヵ月近く経った今も一向に慣れません。ここに引越してきて一番嬉しかったのは、平日の朝晩に食事が提供されることです。自炊の頻度はめっきり落ちてしまいましたが、毎日決められた時間にバランスの良い食事がとれるのは魅力的で、最近、ほぼ毎日お世話になっています。

3月3日(火)				3月4日(水)				3月5日(木)			
お茶漬け (鶏飯風)				ごはん				サンドイッチ			
だし汁				豚バラと厚揚げの 炒め煮				ベーコンと アスパラソテー			
炒め物				和え物				クリームスープ			
漬け物				味噌汁				フルーツ			
朝食				味噌汁				フルーツ			
味付けのり				味付けのり				味付けのり			
朝食				朝食				朝食			
三色そぼろ丼				ごはん				ごはん			
クリームコロッケ				野菜たっぷりポトフ				鯖の竜田揚げ			
味噌汁				れんこんと ひじきサラダ				煮物			
デザート				デザート				豚汁			
夕食				夕食				夕食			



学生寮の食堂

これまで3回の引越しを通して、全く異なる環境での生活を経験して感じたのは、自分が非常に恵まれた環境にいるということです。金銭的な支援を受けられる制度があったり、部活や学業に専念できるように家族が支えてくれていたり、形は違えど様々な恩恵を自分の身で感じる事ができました。私は、来年から大学院で金融工学を勉強するため、部活中心ではない学生生活を初めて送ることになります。環境は変わりますが、自分を支えてくれる方々への感謝を忘れることなく、学業に精進して参ります。

*進路：一橋大学大学院経済研究科



堤 翔太

🏆 仲間の姿

西野 景一郎 (4年FW) 東京・暁星高



4年生18名で行ったタイ旅行は、とても思い出深い時間となりました。大学サッカーを引退し、卒業も間近に迫った今、改めて振り返ると、この旅行はみんなと過ごした時間の尊さを強く感じられる機会だったと思います。特に印象に残っているのは、フォレストアドベンチャーです。木の上を渡ったり高いところから滑り降りたりと、想像していた以上に本格的な内容に最初は少し緊張感もありました。しかし、いざ始めると、みんな一気に夢中になり、怖がる者がいれば周りが盛り上げ、軽快に進んでいく者には自然と歓声上がるなど、とても賑やかな時間になりました。普段から見慣れていたはずのそれぞれの性格も、こうした場面ではまた違った形で表れ、改めてこの学年らしさを感じる場面が多くありました。

*ハヌマン ワールド / プーケット



* ビビ島 / ブーケット

また、海で過ごした時間も強く印象に残っています。タイの海の開放感の中で、みんなで水に入り、思いきりはしゃぎながら遊んだ時間は、学生生活の中でもなかなか味わえない特別なものでした。水を掛け合ったり、泳いだり、ただ笑い合ったりと、気づけば全員が子どもに戻ったように楽しんでいた気がします。それぞれが進路や卒業を目前に控えるこの時期だからこそ、何も考えずに仲間と過ごせる時間がより一層貴重に感じられました。



同じチームで4年間を過ごしてきても、一人ひとりが異なる考えや日常を持っています。その中で、こうして学年全員で旅行に行き、同じ景色を見て、同じことで笑い合えたことは、とてもかけがえのない時間でした。普段から仲の良い学年ではありましたが、今回の旅行を通じて、その居心地の良さや、自然体でいられる関係性のありがたさを改めて実感しました。

引退を迎え、卒業も近づく今、大学サッカーの4年間を振り返る機会も増えてきました。一番印象に残っているのは、やはり4年次のリーグ最終節の上智大学戦で、先制を許すも試合終盤に追いついた試合です。内容としては決して良いプレイばかりではなく、自分のドリブルの未熟さを実感する場面もありました。ただ、その中で「苦手を補うのではなく、自分の強みで目の前の相手を倒す」という意識に切り替えてプレイできました。試合中に自分の弱さに気づきながらも、それを気にするのではなく、得意なプレイで勝負することに集中できたのは、自分の中で大きな変化でした。技術的にはまだまだ課題の多い試合でしたが、自分の在り方や向き合い方という意味で、最も印象に残っています。

苦しい練習や試合の記憶はもちろんですが、仲間と過ごした何気ない時間もまた、かけがえのない思い出として残っていくのだと思います。今回のタイ旅行は、この仲間たちと過ごせる一瞬一瞬を大切にしながら、最後まで自分たちらしく歩んでいきたいと思っています。

*進路：伊藤忠商事株式会社



西野景一郎



西野

カロンビーチ / ブーケット

🏈 旅の恥はかき捨て

八木 琳太郎 (4年FW) 東京・麻布高

この文章の提出日が来た。何を書こう。3日前に3週間ほどのヨーロッパ周遊から帰ってきたので、そのことについて書こうと思ったが、出来事をつらつら書いてもどこか味気ない気がする。そもそも私は今までほとんど海外経験はなかったのだが、去年の夏のハワイを皮切りにベトナムやタイ、そしてヨーロッパと急に海外旅行の機会が増えた。その中で毎度感じるのは、紛れもない私の英語力不足だ。

英語を勉強し始めた中学生の頃から逃げ続けてきた。

中1の時にに入った英語塾も3カ月でやめてしまったし、学校の定期試験を一夜漬けで乗り切っていた中高時代だった。幸い受験勉強の過程でリーディングは使い物になったので、入試での英語はむしろ武器にはなったが、如何せんリスニングとスピーキングが苦手なのである。日本の受験教育の賜物だ。大学に入ってもスピーキングを強化するわけでもなく、そうした授業はむしろ避けて、映像授業のスペイン語で外国語科目の要件を満たした。そんな様子で過ごしてきたため、いざ海外へ行ってもいきなり英語をしゃべることができるわけがない。

まず、久しぶりの海外であるハワイ。飛行機から降りて数分、入国審査で洗礼を浴びた。滞在目的を聞かれるところまではよかったのだが、“hotel”が聞き取れなかったので滞り場所を聞かれていることにも最初は気付かず、また民泊サービスを利用していたため建物の名前も分からないので完全に混乱状態に陥った。そして最後に誰と来たのか尋ねられた際には隣で入国審査をしていた窪田を指さして「He!」と発言。中1の4月に勉強するであろう「He, His, Him」を地で間違える有様。審査官はその発言に呆れて入国を許可。滞り中は瀬崎がすべて必要なことをやってくれたため困ることはほとんどなかったが、なんとも情けない。



*タイの屋台にて

*ハワイ・オアフ島
カイルアビーチにて



ベトナムでも英語ができないことのデメリットを感じた出来事がある。公園を歩いていると「ダーカウ」という競技をしている現地の人たちと一緒にプレイすることになった。ダーカウはバドミントンの羽根のようなものを足で蹴ってつなぐスポーツなのだが、「コーチ」を名乗る男性の指導はほとんど何も分からず、失敗した時も愛想笑いをしていた。そして終了後「コーチ」から10分ほど熱い指導を受けたのだが、どうやら私は失敗してもニコニコしている、やる気のないやつだと怒られていたことを同行していた友人から教えてもらった。言葉が通じないと誤解を与えてしまうのだと身をもって体感した。他にもタイやロンドンでは、地元のパブで外国人に英語で話しかけられたときにもしも英語が喋れたら、もっと仲良くなることができたのではないかと、もどかしい体験が多かった。



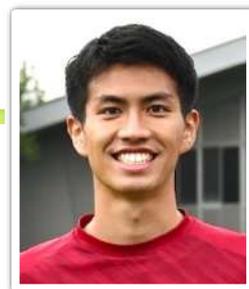
このように私は英語でのコミュニケーションが苦手なわけだが、この半年ほど海外へ行く経験を重ねるなかで、次第に海外で働きたいという思いが芽生えるようになった。英語が苦手だし、日本の環境も好きなので今までは海外勤務を自分が志望するとは思わなかったが、海外での経験はどれも鮮烈であり、その環境に魅了されている自分がある。自分の希望が通るかは分からないが手を挙げ続けようと思うし、もしもチャンスが来たときには、英語力が足かせにならないようにしたい。そしていつかこの西松会新聞で「海外便り」を寄稿できるようなOBをめざして、社会人生活を歩んでいきたいと思う。

英国ロンドン



🏆 焼きそば屋

八巻 太朗 (4年 FW) 東京・国分寺高校



10月に部活を引退して以降、基本的には家にこもって映画を見たり本を読んだりする生活を続けています。1か月半後にはいやでも早起きをして働きに行く生活が待っていることを考えると、学生生活最後の過ごし方としては正解な気がしています。卒業旅行にもまだ行ってないので、旅行の話は、先んじて欧州に飛んでいる同期に任せ、私からは11月に部活の同期と出店した学祭の焼きそば屋について書かせていただこうと思います。

まだ部活動に所属して毎日サッカーにいそしんでいたある日の練習後、少し集まりの悪くなっていた部活後恒例の昼飯で「今年の学祭にア式とは別の団体として出店をしないか」と提案しました。集まりが悪くなっていたとはいえ、面白そうなことにはすぐ飛びつく安部、日程管理や提出書類の管理に強みを持つ星野、家ではあまり家事をしなくせに部活のBBQでは、なぜかずっと肉を焼いている瀬崎、麻布高校文化祭を牛耳っていた八木、細身な堤と、出店を出すにはこれ以上ないメンバーがそろっておりとんとん拍子に話が進みました。

まず今までの学祭を通した主観的な統計から、焼きそばが最も売りを上げやすいと考え焼きそば屋をやることに決定、原価と当日のオペレーションの観点から野菜は入れず、麺・肉のみを具材とする形態としました。店名を「俺の焼きそば屋」と称し野菜なしを正当化し、大盛りを強みに売り出していくこととし団体名を「料理研究会」とすることで味を保証しました。途中学祭実行委員から「今年の出店では、焼きそば屋が7店舗ほどある」という通告を受け、暗雲が立ち込めましたが、変更するのも面倒くさく、そのまま準備を進めました。

そして迎えた学祭当日、ア式の高級ケバブの値段を参考に500円という価格設定で売り出したやきそばが、学祭やきそば市場における基準価格よりも大きく割高になってしまいスタートダッシュには失敗。しかし、2日目以降ベース価格を400円に下げ、需要が落ちこむ夕方には350円に値下げする疑似ダイナミックプライシングの導入と、泥臭さのみで伊藤忠の内定を取った三浦の Powerful な営業力を武器に売上を伸ばし、最終的には40万円弱の売り上げと20万円弱の利益を得ました。適当に始めたことでしたが段々と本気になりはじめ、最終的にはとても良い思い出になりました。社会人になってもこんな馬鹿なことで盛り上がる同期を大切にしたいです。





🏀 自ら学ぶことの大切さ

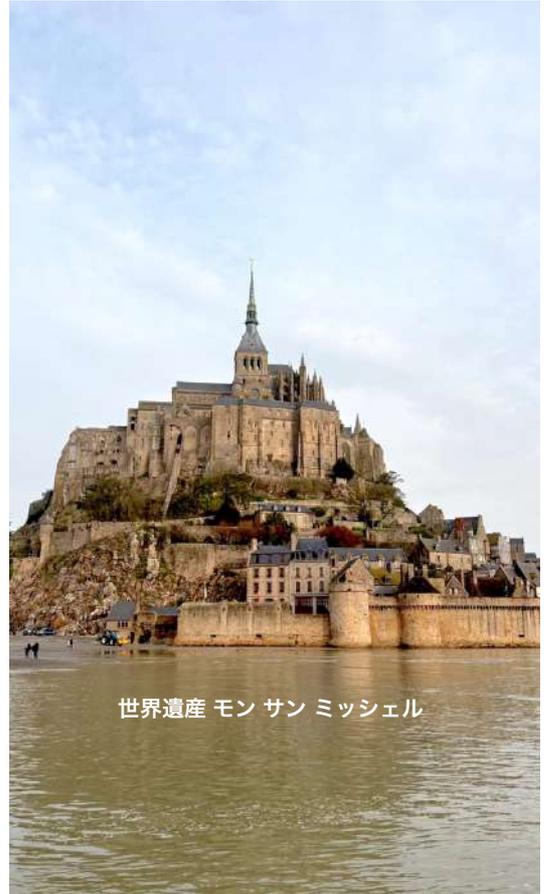
山田 あさひ（4年 MGR） 神奈川・豊岡女子学園高



卒業直前の時期に、同期の小山結愛^{ゆめ}とフランス旅行に行ってきました。初めてのヨーロッパ旅行ということもあり、期待に胸を躍らせていました。世界遺産のモンサンミッシェルからスタートし、パリやずっと憧れであった南仏のニースやエズなど、様々な場所を訪れました。

モンサンミッシェルは、遠くから見たときのシルエットがとても美しく、近づくにつれてその壮大さに圧倒されました。海に浮かぶ城のような姿はとても神秘的で、時間によって景色が変わるのも魅力的でした。修道院の建物は、中世の歴史を感じると共に、かつて収容所として使用されていた過去が存在することを知り、時代によって全く異なる役割を担ってきたのだなと実感しました。美しい景観だけでなく、長い歴史の重みを感じられる場所であり実際に訪れることでより深くその価値を理解することができたと思います。

パリでは、ヴェルサイユ宮殿やルーヴル美術館、サント・シャペルなど有名な所を多く巡りました。どこも歴史的価値が高く、実際に訪れることでフランスの歴史や文化の豊かさをより身近に感じることができました。特に建物の壮大さや美術作品の美しさは写真で見るとは全く違い実際にその場に立つことで強い感動を覚えました。今回の訪問を通してパリが世界中の人々を惹きつける理由を理由を実感することができ、またフランスの人々にゆとりを感じるのには文化の影響も大きくあるのではないかと思います。



世界遺産 モンサンミッシェル



サントシャペル



モナリザ / ルーヴル美術館



ヴェルサイユ宮殿
鏡の間

そして、南仏地方では、ニースをはじめ、エズやマントン、モナコも訪れました。全ての街で街並みが変わるのが非常に興味深く、特に、エズで見た景色があまりにも綺麗で、おばあちゃんになってからまた絶対に訪れたいと強く感じました。「社会人頑張ろうね」とゆめと誓い合ったのも、この景色を見た時のことでした。



南仏ニースの市街



地中海を見晴らす南仏エズにて

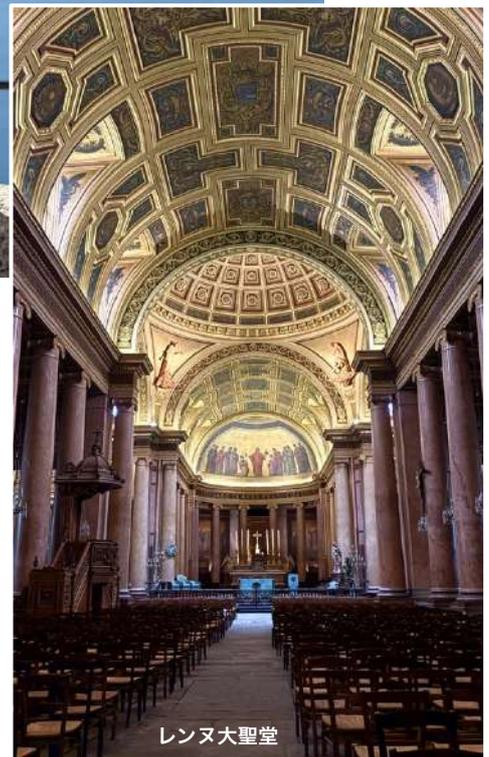


小山結愛

山田あさひ

フランスの中では多くの景色や文化遺産を目にしましたが、その中でも私が印象に残っているのは、列車の乗り換えで降り立ったレンヌで、たまたま訪れたレンヌ大聖堂の光景です。あの時の感動は、これからも忘れることはないと思います。思いがけない場所で心を動かされる経験をしたことで、旅の楽しさや価値を改めて実感することができました。

*レンヌはフランス西部に位置するブルターニュ地方の中心都市でパリからモンサンミッシェルへ向かう列車の乗り換え駅でもある



レンヌ大聖堂

この旅を通して私が最も学んだことは、思い込みや偏見がいかに無駄か、固定観念よりも自分が経験したことを大切にしようということです。旅行に来る前、「フランス人は親切ではないから、親切にされることを期待してはいけない」という話を聞いていた。正直、現地に来るまでは本当にそうかもしれないと不安がありました。でも、まったくそうではなかった。フレンドリーで笑顔が素敵な人が多かったり、目が合うと挨拶をしてくれたり、駅で迷っていたら女の人の方から声をかけてくれたり、たまたま訪れた市場のアンティーク屋さんのおじさんがプレゼントをくれたり。本当に温かくて素敵な人ばかりで、最初に少しでも不安に思っていた自分が申し訳なく感じたほどでした。旅行に毎回行くと思うのは景色や食、異文化体験などももちろんですが、結局旅で1番思い出に残るのは人との思い出だと思います。人との関わりの中で温かいエピソードができる素敵な場所だったなという思い出になります。

最後になりますが、やはり、ア式での思い出も人に恵まれたからこそいい思い出として残っているのだと思います。社会人になっても、人との出会いに感謝し、また、自ら学ぶことの楽しさや大切さを忘れず頑張っていきたいと思います。

*進路：読売新聞社



🏆 人生を彩るもの

山本 真子（4年 MGR） 東京・国分寺高



はじめに、OB・OGの皆様、日頃より多大なるご支援、ご声援を賜り、心より感謝申し上げます。皆様のお陰でとても充実した4年間の部活動生活を送ることができました。今後は私もOGとして現役世代をサポートしていく所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします。

私は、高校1年生の頃からサッカー部のマネージャーとして活動していました。中3の頃口シアW杯とアジア杯をリアルタイムで観戦し、こんなに面白いスポーツがあったんだ！と感動したことがきっかけです。その感動の勢いに任せて、高校入学直後にはサッカー部への入部を決めていました。しかし情けないことに、サッカーを観るのが好き、と言いつつも、特定のクラブに思い入れがあるわけではありませんでした。当時の私にとってプロの試合をわざわざスタジアムまで観に行くことは、どこか心理的なハードルが高く感じられていたのです。日々の部活動で、目の前の選手たちを支え、一番近くでサッカーに関わっているだけで、どこか満足してしまっていた部分もありました。

そんな私が初めてJリーグ観戦をしたのは、2023年5月12日です。Jリーグを観に行ってみたい、という私のぼやきを同期の選手が拾ってくれたのがきっかけでした。自分ひとりではなかなか踏み出せなかったサッカー観戦に連れ出してくれた同期に、今でもとても感謝しています。試合当日、お祭りみたいに賑わうキッチンカーの数々、魅力的な演出、そして初めて体感するスタジアムの熱狂を、今でも鮮明に覚えています。テレビ越しで観るサッカーも、部活動で目の前で観るサッカーも大好きでしたが、スタジアムで観るサッカーの熱量に圧倒されました。演出も試合内容も印象的なものばかりでしたが、当時何より印象に残ったのは、「サポーター」という存在です。バックスタンドで、メインスタンドで、そして何よりゴール裏でクラブを自分ごとのように後押しする姿に、サッカーという競技そのものと同じくらいに感動しました。マネージャーとして選手を支える喜びとはまた違う「ひとりのファンとして全身全霊でクラブと運命を共にする」という熱い関わり方に胸を打たれ、「私もこの熱狂の渦に飛び込みたい、あの一員になりたい」と、自分でも驚くほど心が躍りました。



それから年内にもう一度ひとりでスタジアムに足を運び、翌年にはユニフォーム購入。確か10試合強くらい観に行った気がします。毎週末に楽しみがある生活は、今までにないほど充実していました。就職活動や資格試験の勉強などで、最近はあまりスタジアムに足を運べていないのですが、それでも画面越しに試合結果を追いかける時間は、今でも大切な息抜きです。画面越しに一喜一憂するだけで、また明日から頑張ろうという活力が湧いてきます。色々和生活が落ち着いたなら、またあの熱気の中に飛び込みたいです。

サッカーに出会えて本当に良かったと思っています。

好きなものがあることは幸せなことで、人生を鮮やかに彩ってくれるんだと、この4年間を通じて深く感じました。これからも「好き」の気持ちを大切に、自分の人生を歩んでいきたいです。この人生のうちにFC東京がリーグ優勝することを祈り、本稿の結びとさせていただきます。

*進路：東急不動産株式会社



追悼 逝きし仲間を偲んで

矢尾板 健二 (昭48卒) 2025年5月15日 逝去



現役時代の矢尾板さんは1年次からマネージャー役に徹し、陰ながらサッカー部を支え続けた方でした。卒業後、住友商事に務めてからもサッカーをこよなく愛し、常に笑顔を絶やさぬ優しい人柄で後輩たちに慕われていました。ご家族によれば、晩年「レピー小体型認知症」という難病を患い、2024年の7月に腰を骨折し入院したのをきっかけに病状が一気に進み亡くなられたということです。心より哀悼の意を表します。以下、故人を知る方々の追悼メッセージを掲載します。

 宮内 正敬 (昭47卒)

矢尾板さんとは彼がサッカー部のマネージャーになった時からの友人です。昭和44年入学ですから私の1年後輩で、大学の時は3年間お付き合いしました。昭和44年は東大の入試がなかった年で、もしあったら東大に入り、お会いできてなかったかもしれません。兄上は東大とっておりました。まさに秀才兄弟ですね。

彼の素晴らしいところは「絶対に怒らない」ことです。そのような人を彼に会うまで知りませんでしたし、その後も、そうした人に会ったことはありません。ご自分でも「怒ったことはない」とおっしゃっていました。彼のその言葉にもものすごく感動したことを覚えております。普段穏やかでも何かの時に怒る人は、いくらでもあります。そして又サッカーに関しても在部中に一度もプレイしたいと言ったことはなかったと思います。これもユニークといえばユニーク。つまり、20歳前にして「己のことを理解、把握していた」ということです。

今回の彼の訃報に接し、「えー、まさか、残念」という気持ちが真っ先に浮かびました。ご自分を律し、清く正しく生きているというのが矢尾板さんに対してずっと抱いてきた気持ちでしたので、もっともっと長く生きて欲しかった。そしてサッカーを離れて友人としていろんな話をしてみたかったと、今つくづく思っております。一橋時代の3年間でしたが、大変有意義な時間を過ごさせていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

昭和46年(1971)7月 三商大戦優勝 於小平グラウンド



🏆 矢野 進一 (昭48卒)

矢尾板君の訃報に驚いています。よく彼の家に遊びに行き、泊めてもらったりしていました。4年生の夏休みに一緒に北海道旅行に行ったのですが、彼は途中から姿を消したと思ったら、何と交際中の彼女の家に行ってしまう、私はひとりで旅行の続きを回ったことが懐かしい思い出です。ちなみにこの彼女が現奥様です。書きたい事は山ほどあります。彼の冥福を祈っています。

🏆 緒方 徹 (昭49卒)

サッカー部のマネージャーだった矢尾板さんは、東京都大学サッカー連盟と折衝しながら公式戦の日程や会場の管理、学生審判人数の割当、都学連加盟校のデータ整理など縁の下の力持ち的な仕事を熱心にやっておられました。卒業後も色々声をかけていただき、私の就職の際も熱心に住友商事に誘っていただきました。報道に興味があった私がNHKに決まった時には、お礼とお詫びに行ったことを思い出します。実技は得手ではないものの、本当にサッカーが好きな方で皆さんが覚えておられるように物静かですが、しっかり意見を言うタイプの先輩だったと思います。



🏆 山崎 彰人 (昭49卒)

矢尾板さんは2学年上のマネジャーでしたが、都学連との折衝をされていて、忙しそうに車でいつも移動されていたのが印象的でした。大学生では専任でこういう仕事をする人がいるのだ、と感じ入ったことをよく覚えています。卒業後の矢尾板さんは住商で情報システムを担当されていて、ロンドン駐在が長かったと記憶します。私のロンドン駐在時期と重なり、時々電話で話をした記憶はありますが、会う機会は限られました。一度だけヒースロー空港で欧州便の搭乗口に向かって全力疾走する矢尾板さんを、たまたま違う国に出張する私が後ろから見たことがあります。常に忙しそうでした。女子マネOGの佐藤博子さんがロンドンに住むことになり、矢尾板さんに紹介して面倒を見てあげて下さいとお願いしたら快く引き受けてくれました。極めて有能で誰にも優しい人でした。ご冥福を祈ります。

🏆 吉岡 基夫 (昭49卒)

矢尾板さんは私と同じく住友商事に勤務され1982-84年頃、ご家族でロンドンに駐在されていました。出張していた私を御自宅に招き大御馳走で歓待してくださいました。食後に幼稚園に行っておられたお嬢様とアルファベットが書いてある絵本を順番にAから読んでいきPまで来たとき、私のPの発音がおかしいとお嬢様に何度も繰り返してPの練習をして頂きました。日本語風の軽いPではなく、つぐんだ口から急に唇を開けながら息を吹き出す様にPを発音するのです。最後にBetterと言っておられました。暖かい幸せなご家庭をお持ちだと思いました。御冥福をお祈り致します。

内田 守 (昭50卒)

矢尾板さんの訃報に接し、驚くとともに昔の矢尾板さんのお顔を思い浮かべました。当時の個性豊かなメンバーが多かった中で、物静かで温厚な紳士（今から思えば好青年）といった感じの先輩でした。いつも微笑んでいた印象があります。またお会いしたかったです。ご冥福をお祈りいたします。合掌

遠藤 環 (昭50卒)

訃報を聞き、大変残念で悲しい思いです
矢尾板さんはジェントルマンそのものというイメージで、いつもにこやかで楽しい方でした。陰で色々チームの事を考えての行動もあり素晴らしい方だったと思います。

笠間 昭彦 (昭50卒)

矢尾板さんとは同じ京成電鉄の沿線に住んでいたので何回か通勤列車で一緒になり、お兄さんが東京海上の役員をしていたので共通の話題でいつも盛り上がっていました。私が一方的に話すことが多かったのですが、いつもニコニコ笑いながら暖かく受け止めていただき控えめで決して人の悪口は言わないジェントルマンそのものでした。まだお若いのに旅立たれ残念だし、寂しいです。

谷口 伸一 (昭51卒)

矢尾板さんは私が1年生のときの4年生、雲の上の存在で、協会の窓口をされていました
シーズン終わりか卒業間近の最後の紅白戦、矢尾板さんが右ウィングで、何回もフリーでボールを受けていて、「ポジションニングが上手いな、クレバーだな」という印象が残ってます。

会社の先輩でもあるのですが、仕事での接点はありませんでした。
新福 正さん (昭48卒) が白血病で慶應大学病院に入院されているとき、矢尾板さんの号令で何人かのOBと骨髄移植に適合しているかどうかの血液検査で病院に行きました。検査が終わって矢尾板さんが、「皆、ありがとう、新福も喜んでくれた、もう望みはないかも知れないが、こうやって皆が検査に来てくれたことは彼の励みになるだろう」とおっしゃってました。優しい方でした。

加藤 富朗 (昭52卒)

矢尾板さんとは卒業は入れ替わりで学生時代に一緒にプレイすることはありませんでしたが、卒業後折に触れて何かと優しく接していただき、ロンドンご駐在の際、たまたまロンドンに出張した時に同じくロンドン滞在中のイモケン（佐藤博子さん）と一緒に食事に誘っていただき、楽しく歓談した記憶があります。本当に面倒見の良い優しい先輩でした。ご冥福をお祈りいたします。合掌

平成24年 (2012) 12月29日 忘年会 於「又一順」日暮里 リージョン



平成29年 (2017) 12月29日 忘年会 於「新橋亭」



橋詰 邦弘 (昭56卒) 2026年3月1日 逝去



昭和56年卒メンバー



橋詰さんの現役時代は、テクニックに秀でたMFとしてチームを牽引した選手でした。卒業後は共同通信の政治部の記者として活躍。一方でサッカーに対する情熱も失うことなく、忙しい仕事の合間を縫ってOB戦にも積極的に参加し、山形への遠征試合も手配してくれました。晩年はガンとの闘病を続けながらも、総会や小平Gに足を運び、現役のための支援・激励を惜しまず、今年1月10日の総会にも杖をつきながらではありましたが、元気な姿を見せてくれました。その40日後の訃報、享年67、若すぎる逝去でした。謹んで、心からの感謝と哀悼の意を捧げます。

 有田 稔 (昭44卒)

OB 戦や現役リーグ戦の応援等で何度かお会いしましたが、存在感にいつも圧倒されてました。若い方が亡くなられるのは寂しい限りです。ご冥福をお祈りいたします。

 山崎 彰人 (昭49卒)

橋詰君の訃報を聞き、1月10日の西松会で会ったばかり、言葉も交わして元気そうでしたので、大変ビックリしました。本当に残念です。日比谷高校出身というのはあまり同窓で多くはないが、皆ユニークなキャラクターでしたが、その中で橋詰君は常識的、協調的な性格、大人の風格が若い頃からありました。私が代表幹事を務めていたとき、西松会の幹事も引き受けていただき、サポートをしてもらったので有難く思っていました。また東京2020オリパラでは共同通信の幹部として各競技の取材に当られました。私が組織委員会の車いすフェンシングスポーツマネジャーとしてパラ種目のいろいろな問題に直面し、あちこちで苦勞していたのでマスコミからのサポートをお願いしたのですが、部下を動員して誠実に取り組んで貰いました。あまりに早い旅立ちに言葉ありませんが、ご冥福を祈ります。

 内田 守 (昭50卒)

橋詰さんの突然の訃報に接し、ただただ驚くばかりです。

「日比谷サッカー部」から「一橋ア式蹴球部」という同じ経歴でしたので、一緒にボールを蹴ったことはないのですが、長い間の先輩・後輩の仲でした。ご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

 河内 純一郎 (昭51卒)

まだ、お若いのに残念です。

検見川で何回かご一緒した覚えがあります。ご冥福をお祈りします。

 谷口 伸一 (昭51卒)

びっくりしました。まだまだ若いのに残念です。

2017年の山形遠征では、宿の手配、蔵王、山寺への案内などお世話になりました。

学生時代に接点はありませんでしたが、検見川では何度も一緒にプレーしました。

お会いしていて気持ちのいい方でした。ご冥福をお祈りします。

 古荘 健一 (昭52卒)

とても吃驚しております。

いつも東大の検見川グラウンド一緒に試合に出ていましたが、ここ2年不参加でしたので

とても心配しておりました。何とも言葉も見つかりません。。。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

山根 言一 (昭52卒)

橋詰さんは我々の代とちょうど入れ違いで、現役時代は全くつながりがありませんでした。卒業後、東大OBとの定期戦や他校との対抗試合にお誘いしたのをきっかけに一緒にボールを蹴るようになりました。2007年の東大戦には参加してくれた証拠写真が残っています。その後も体調を崩すまでは都合のつく限り元マネジャーだった久恵夫人と共に、ほぼ毎年一緒にサッカーをすることができました。長い間お付き合いをさせていただきました。プレイに派手さはないのですが、ゴールに対する嗅覚が鋭くいいところで点を取ってくれました。おそらく現役時代もあのようにして得点を重ねていたんだろうな～、あの得点感覚は羨ましい限りです。



そのようなお付き合いを続けるうち、2016年に「山根さん！山形で試合しませんか？」と声をかけてくれました。仕事で関係のあった山形市議を通して山形大学OBとの試合をセットしてくれました。娘さんがNHK山形放送局に在籍していた関係もあり、山形県とはかなり深いお付き合いだったようです。3年間続けて試合をさせていただいたおかげで、かみのやま温泉、蔵王温泉、山寺など山形観光も満喫できました。橋詰さん、ありがとうございました。もっと長くお付き合いしたかったのに残念です。 合掌



🏆 高橋 真理子 (昭52卒 マリンコ)

突然の訃報にびっくりしています。まだお若いのに。
山形遠征の時は、宿の手配も観光も、色々手配してくださって、お世話になりました。
宴会で、昔の勤務校のPTA会長と出会い、橋詰君の顔の広さに感心したところでした。
楽しい思い出ばかりです。心からご冥福をお祈りいたします。

 浅井 幸一 (昭53卒)

残念です。言葉ありません。

今年1月10日の西松会総会で会ったのが最後になってしまいました。
現役時代重なったのは1年間だけでしたが、OB戦や総会で会った時は喫煙スペースに同伴したりしていました。山形遠征も良い思い出になっています。
心よりご冥福をお祈りいたします。

 小林 治 (昭53卒)

突然の訃報に、ただただ驚いております。慎んで、哀悼の意を表します。

 深谷 徹 (昭53卒)

橋詰くんとは検見川でも大阪でも東大OBや男組との対戦で共に戦いました。
サッカーセンスは現役時代から秀でたものがありました。会話も楽しく、
報道関係者としてフェアな考え方をされていたと思います。まだ若いのに本当に残念です。

 石川 哲 (昭54卒)

忘れられないスルーパス。橋詰君が2年、私が4年の秋のリーグ戦、東工大戦。
2点のビハインドを小池キャプテンが同点に持ち込んだ終盤。中盤でボールを持った橋詰君と
トップで張っていた私と目が合い、スペースに走ると彼から素敵なスルーパス。
完全に抜けて決勝点になった。あの時の「テツさん!!」の声は今でも明確に覚えています。
普段寡黙な彼がゲームで雄弁になる瞬間でした。天国でもサッカー楽しんでください。

 五座 哲也 (昭54卒)

ただただ驚いています。本当に残念です。

彼は2学年下ですが、現役時代は共に中盤でプレイし、私が4年の時は、彼が offensive,
私が defensive なポジションでプレイしました。とにかくボールを相手から奪って彼に預けると
何とかしてくれる頼もしいプレイヤーでした。サッカーセンスに溢れていて、悔しいけれど、
私より少しサッカーが上手でした。私が4年時のリーグ優勝の、立役者のひとりでした。
卒業してからも、彼が大阪赴任時代、山形遠征や検見川での試合など、たくさん思い出があります。
まだまだ活躍して欲しかったし、一緒にサッカーがしたかったです。ご冥福をお祈り申し上げます。



2018年 山形遠征

橋詰久恵 橋詰 船倉 浅井 五座 日置 高橋 山根



2023年 東大OB/職員 定期戦 於検見川

古荘 深谷 山根 石川 福本 小林 船倉 五座 日置 橋詰



2023年 リーグ戦 vs 日大生物資源 於小平G



有田 橋詰 船倉 日置



2024年 西松会総会 / 優勝祝賀会. 於如水会館

橋詰邦弘
(副会長 昭56卒)

🏆 日置 慶太 (昭56卒) ・ ・ 令和8年3月6日の告別式にて捧げた弔辞より

橋詰君の御霊前に、謹んでお別れの言葉を申し上げます。

あなたの突然の訃報に接し驚くと同時に深い悲しみの気持ちでいっぱいです。つい2ヶ月前の1月10日、如水会館で行われた一橋大学ア式蹴球部の西松会総会に於いて、あなたはOB、現役、そのご父兄を含む150名ほどの前で副会長として締めめの挨拶を務められました。そのときあなたは、あえて杖を持たずに歩いて壇上に上がり、現役学生に対して力強く、ア式蹴球部をもっと強いチームにして欲しいと、熱量の高い思いを語りました。

あなたとは、今から遡ること約50年、昭和52年4月に一橋大学に入学し、すぐにア式蹴球部に入部して以来のお付き合いです。同じ時期に、女子マネージャーとして奥様の久恵さんも仲間に加わりました。あなたは日比谷高校サッカー部から入部し1年生でレギュラーとなり、4年間公式戦すべての試合にフルに出場し、大活躍しました。当時の我々部員の目標は、大学サッカーの最高峰である関東大学リーグへの昇格を達成することでした。そのことを常に夢見て日々の練習や合宿、遠征試合と部員一丸となって一生懸命努力しました。現在のJリーグのマリノスやレイソル等の前身の社会人チームとも何度か対戦し、また毎年行った関西遠征で関西の強豪大学とも互角に戦い、チーム力を向上させました。新潟や長野での夏合宿も真剣にこなしました。懐かしい思い出です。

1年生の時に東京都1部リーグから残念ながら降格しましたが、翌年あなたの活躍で優勝して、すぐに復帰を果たしました。あの年の大会は、まさにあなたの大会と言っても過言ではありません。そして4年生の時、私が主将になり、あなたは副主将としてチームを引っ張ってくれました。あなたの活躍で関東大学リーグ昇格のチャンスがありましたが、残念ながら最終戦が不可解な判定により引き分けとなり、昇格の夢を絶たれました。あのときは悔しくてみんなで涙しましたね。

その後、お互い社会人になってからも、OBチームの一員として年に数回ではありましたが、一緒にプレイしました。仕事でのご活躍はテレビ等で目にしていましたが、サッカーで会った時には、特に仕事の話をするわけではなく毎回冷静にプレイしていました。そして、2002年のサッカーW杯日韓大会の開催に際して、大会直前に両国の国会議員チームがサッカーの記念試合を行うことになりました。その準備として日本の国会議員チームと外国人記者団チームとの練習試合を行いました。議員さんたちのメンバーが不足しているので助っ人として来て欲しいと、あなたから声がかかり、当時の国立競技場で一緒にプレイしたことは、私の中で忘れられない貴重な体験です。そのときに、あなたが国会議員の皆さんと親しくお話する姿を見て、あなたの業界人としての人脈の広さをあらためて認識しました。また、OBチームとして山形県に遠征したことがありましたね。そのときは奥様に加えて、当時、山形で仕事をされていた、お嬢様の彩季さんも応援でグラウンド及び宿泊所の温泉にも来ていただきました。

身体の強かったあなたが、ここ数年、病気治療に入ってから、あなたは、もう一度ピッチに立つ、と言って頑張っていました。くやしいですね。残念ながら、それはもう叶いません。私の気持ちとしては、夢の中でも、あなたとまた一緒にチームでプレイしたいです。そしてこれからも、あなたを含めたア式蹴球部の仲間との絆を大切にしていきたいと思っています。橋詰邦弘君、出会いから約50年、本当にありがとう。心よりご冥福をお祈りいたします。

令和8年(2026)3月6日 告別式



🏆 あれ、卒業証書、もらってないよな？

福本 浩（昭52卒） 編集長



昨年から、ずっとメディアで騒がれていた元清水市長の学歴詐称事件。急に気になり始めた。卒業式に出なかったので卒業証書もアルバムも手元にない。宇都宮の実家にも届いていない。本当に卒業してるのかと。おぼろげな当時の記憶を辿ると、西松会新聞創刊号に書いたように私は進路に悩んでいた。就活もしなかった。で、無謀にもアメリカに留学しようと決めた。その準備で頭がいっぱい、卒業のことなど頭になかったようだ。ゼミの教授に休学扱いにしてと頼んだ気もするが、定かではない。今思うと、きちんと学生課に行って手続きしないとダメだったかも。右下の写真は、卒業式後に撮られたサッカー部同期たちの写真。当然、私はどこにもいない。



卒業以来、長くテレビ業界で生きてきたが、どこの大学を出たかは一切関係なかった。卒業証書の提示など求められたこともない。ずっと忘れてた。で、上述の事件以後、もし一橋大学を、卒業していなかったとしたら、西松会新聞の編集長をやっているいいのか、と不安になったわけである。そりゃサッカー部に在籍していたと仲間は認めくれると思うけど、確かな卒業の裏付けがないからなあ。

「こら、ウダウダ書いてないで、早く結論を言え！」はい、了解。3月の初め、ネットで調べ、覚悟を決め、大学の教務課宛に卒業証明書の申請書類を郵送した。すると1週間も経たないうちに送ってくれた。紙っぺら1枚だけど、少しホッとす。でもねえ、何の感慨もない。腑には落ちない。やっぱりあれですよ。仲間と一緒に卒業式に出ないと実感にはならないし、記憶にも残らない。人生のセレモニーって大事だなあ。私は成人式にも出ていないし、勤めていた会社を退職したときも、仕事の引退、還暦祝、古希祝の会も恥ずかしいからやってない。残るは自分の葬式・・死んだ後ではわかんないから、生前葬でもやるか、などと思う今日この頃である。ともあれ、今年も無事に新聞を発行できた。これにて締め！「え、こんな雑な編集後記でいいの」と思ったあなたは正しい。ご批判は甘んじて受けます。悪しからず。

